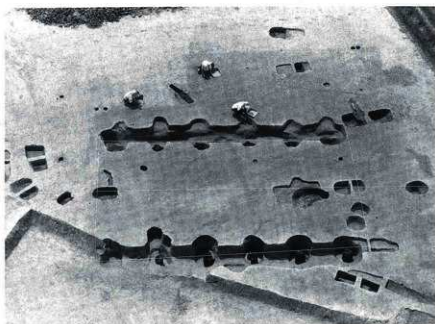


栗東町埋蔵文化財発掘調査

1992年度 年 報



財団法人栗東町文化体育振興事業団

例 言

1. 本書は、財団法人栗東町文化体育振興事業団が受託した、1992年度埋蔵文化財発掘調査事業の概要と、栗東町教育委員会による国庫補助事業調査および町事業調査の概要である。
2. 調査にあたっては、滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東町教育委員会が調査主体となり、財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した。尚、国庫補助事業および、町事業調査は、栗東町教育委員会が実施した。
3. 調査担当は、平井寿一、大崎隆志、近藤 広、雨森智美、佐伯英樹、猿向敏一、橋本奈保子、藤岡英礼、清水好洋（町教委兼務）が行った。
4. 本書の作成は、調査内容について各担当者が行い、⑦野尻遺跡〈報告〉については、通産省工業技術院地質調査所 寒川 旭氏に玉稿を賜った。
5. 本書の編集は、執筆者の意向をもとに雨森が行った。
6. 各調査内容中の調査地位置図は、スケールを指定しているもの以外はすべて、5千分の1である。

目 次

例言・目次	1	縄 遺 跡	52
事業報告	2	下 鈎 遺 跡	60
遺跡位置図	3	下 鈎 東 遺 跡	69
受託調査		中 沢 遺 跡	70
調査一覧表	7	霊仙寺遺跡	74
辻 遺 跡	8	国庫補助調査	
高野遺跡	10	調査一覧表	75
岩畑遺跡	16	蜂屋遺跡	76
中村遺跡	22	高野遺跡	77
狐塚遺跡	24	下 鈎 遺 跡	78
手原遺跡	26	町事業調査	
椿山池ノ浦遺跡	34	調査一覧表	79
野尻遺跡	35	蜂屋遺跡	80
〈報告〉野尻遺跡の地震跡	40	龍王古墳	81

表紙の写真 下鈎遺跡の独立柱建物跡

事業報告

1. 発掘調査事業

受託 33件

内1991年度からの継続 2件

1993年度への継続 1件

町事業・国庫補助事業への職員派遣 3件

2. 普及啓発事業

(1) 現地説明会(町教委共催)

下鈎遺跡 1992年5月2日 参加者193人

手原遺跡 1992年8月8日 参加者 70人

(2) スライド報告会・速報展

(町教委・町博物館共催)

速報展 1992年8月4日～8月30日

入館者のべ人数約2,400人

スライド報告会 1992年8月22日

参加者 34人

(3) 講師等職員派遣

栗東町 J. C. 1992年6月21日

見る知る考える栗東の町づくり

(於 岩畑遺跡)

栗東自然観察の森「青少年科学教室」

遺跡のあった頃の自然環境を調べよう

開講式講演 1992年7月22日

縄遺跡花粉採取 1992年8月6日

大宝西公民館 1992年8月5日

下鈎遺跡調査成果説明会

(4) 部内研修

作業員研修 1992年10月23日

斎宮歴史博物館ほか

(5) 冊子等の発行

1991年度年報発刊 1992年8月1日

1991年度年報Ⅱ発刊 1993年3月31日

(6) 体験おもしろ歴史教室 参加者20人

古代食や武器をつくる1992年5月9日

埴輪をつくる 5月16日

埴輪を焼く 5月30日

勾玉をつくる 6月6日

日向山古墳・山城見学 6月13日



下鈎遺跡現地説明会

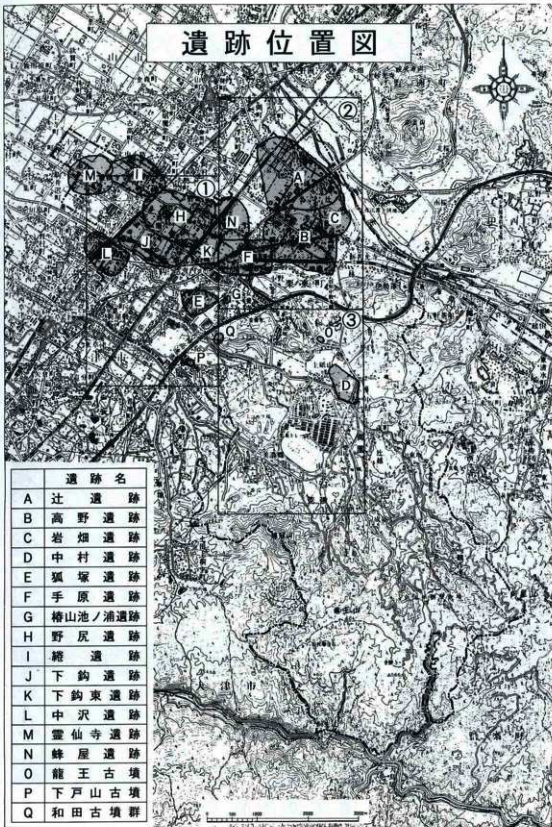


おもしろ歴史教室(古代食をつくる)



おもしろ歴史教室(埴輪をつくる)

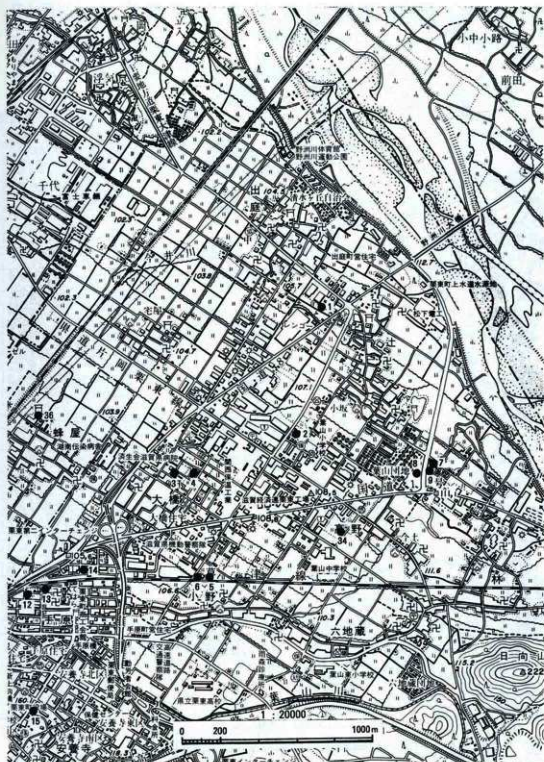
遺跡位置図



	遺跡名
A	辻遺跡
B	高野遺跡
C	岩畑遺跡
D	中村遺跡
E	狐塚遺跡
F	手原遺跡
G	椿山池／浦遺跡
H	野尻遺跡
I	纏遺跡
J	下鉤遺跡
K	下鉤東遺跡
L	中沢遺跡
M	靈仙寺遺跡
N	蜂屋遺跡
O	龍王古墳
P	下戸山古墳
Q	和田古墳群



遺跡位置図 ①



遺跡位置図 ②



遺跡位置図 ③

財団法人栗東町文化体育振興事業団

埋蔵文化財調査

受託事業一覧表

No	遺跡名	原因	調査地	遺構	遺物	ページ	担当	備考
1	江 渡 跡	工場併用倉庫建設	辻467-2,470-1他2筆	竪穴住居(古)、ピット(古~平)、溝(中世)	須恵器、土師器、黒色土器、灰陶器	8-9	藤岡	
2	高 野 遺 跡	事務所建設	高野字下戸別当573-5	流路(古)、耕作痕・ピット(不詳)	古式土師器(甕、甕、器台)	10	雨森	
3	高 野 遺 跡	共同住宅建設	大橋4丁目316	溝(古)	須恵器、土師器	11	橋本	
4	高 野 遺 跡	造成工事	大橋4丁目304	竪穴住居(古)、溝(中世)	器台(古)	12-13	橋本	
5	高 野 遺 跡	事務所建設	大橋7丁目636-1他6筆	竪穴住居、溝(古)	土師器	14	清水	
6	高 野 遺 跡	事務所建設	大橋7丁目744	溝、柱穴(中世)、土取り穴(近代)	須恵器(奈)、土師器(中世)、瓦(近代)	15	佐伯	
7	岩 畑 遺 跡	事務所建設	林314-1	竪穴住居、溝、ピット	須恵器、土師器	16-17	大崎	
8	岩 畑 遺 跡	倉庫建設	林字高丸307-1	竪穴住居・土壇(古)、竪穴柱建物(奈~中世)	須恵器、土師器、黒色土器、鉄器	18-19	近藤	
9	岩 畑 遺 跡	宅地造成	林字高丸311-1	竪穴住居、溝、土壇(古)、柱穴(中世)	須恵器、土師器、琴柱形石製品、鉄製品	20-21	平井	
10	中 村 遺 跡	倉庫建設	御園字谷2055-1	溝、ピット(鎌)	瓦器	22-23	藤岡	
11	狐 塚 遺 跡	造成工事	安養寺7丁目618,619	溝(古、奈)、ピット(奈)、土壇(不詳)	縄文土器、埴輪、須恵器(墨書)	24-25	雨森	
12	手 原 遺 跡	倉庫建設	手原5丁目1221他3筆	竪穴柱建物(奈~中世)、溝(中世~近代) 井戸(奈~平)	須恵器、土師器、黒色土器、瓦、灰陶器、鉄器、木器	26-27	近藤	
13	手 原 遺 跡	共同住宅建設	手原4丁目1190	竪穴柱建物(白)、瓦葺(奈)、溝(中世)	軒丸瓦、九瓦、平瓦、須恵器、土師器	28-29	雨森	
14	手 原 遺 跡	倉庫建設	手原7丁目836,837	竪穴柱建物(奈、平、中世)、井戸(中世)、溝(白)	軒丸瓦、石帯、須恵器、土師器、黒色土器	30-33	雨森	
15	楊山池ノ浦遺跡	事務所建設	安養寺6丁目1-44	竪穴柱建物、溝	須恵器、土師器(組片)	34	大崎	
16	野 尻 遺 跡	工場建設	下鉤字幸奈904-1	ピット、溝、土壇	須恵器、土師器(組片)	35	大崎	
17	野 尻 遺 跡	土地区画整理	純字地京401他	溝、土壇(奈~古・中世初)、柱穴(中世初)、地蔵跡(江戸)	弥生土器、須恵器、土師器、褐色土器、中世土器、輸入組器、朱鉄、石器	36-41	横向	
18	野 尻 遺 跡	土地区画整理	純字大蔵地73他	溝、土壇(奈~古・中世初)、溝(古)、暗渠排水(近代)	弥生土器、須恵器、土師器、褐色土器、中世土器、輸入組器、朱鉄、石器	42-45	横向	
19	野 尻 遺 跡	造成工事	同原字五反町46他	流路(奈末)、耕作痕、溝(中世初)	弥生時代、黒色土器、土師器	46-47	横向	
20	野 尻 遺 跡	倉庫建設	野尻263,265	土壇(縄)、溝、竪穴柱建物(平)	石蔵、土師器、黒色土器	48	藤岡	
21	野 尻 遺 跡	造成工事	下鉤字幸枕口923-1他1筆	流路(古)	須恵器、土師器(古~奈)	49	橋本	
22	野 尻 遺 跡	道路改良	下鉤地先	竪穴住居、溝(古)、暗渠排水	須恵器、中世土器、水晶加工品	50-51	橋本	
23	純 遺 跡	倉庫建設	北中小路字竹ノ花1-1,7-1	竪穴柱建物、暗渠排水溝(中世)	陶器、瓦(中世)	52-55	橋本	
24	純 遺 跡	社員寮建設	北中小路字南木戸410-1	竪穴柱建物18棟・井戸6基・土壇・溝(平後)	須恵器、黒色土器、(墨書2点)他	56-57	清水	
25	純 遺 跡	共同住宅	北中小路417-1,417-3	竪穴柱建物、溝、井戸(平後)	須恵器、土師器、黒色土器	58-59	清水	
26	下 鉤 遺 跡	倉庫建設	下鉤字神ノ子1217-1他1筆	流路・竪穴柱建物(奈)、土壇(古)、溝(平)、瓦葺(奈~鎌)	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	60-61	雨森	91から継続
27	下 鉤 遺 跡	倉庫建設	下鉤字下神ノ子1220他	竪穴柱建物・土壇(奈)、溝(平)、瓦葺(奈~鎌)	弥生土器、石器、陶磁器(平~鎌)	62-65	佐伯	91から継続
28	下 鉤 遺 跡	倉庫建設	下鉤字下神ノ子1219	竪穴柱建物・鳥居状遺構・溝(奈)	弥生土器	66-67	佐伯	
29	下 鉤 遺 跡	共同住宅建設	下鉤706-1の一部	暗渠排水(中世)	土師器(中世)	68	橋本	
30	下 鉤 家 遺 跡	工場建設	上鉤字八反田124-1他1筆	竪穴柱建物、包含層	古式土師器、土師器	69	大崎	
31	中 沢 遺 跡	造成工事	中沢字中田194-1	河道・溝・ピット・墳墓(奈~古)	弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、石製品、木製品(鎌倉期、長閑丸)	70-73	平井	
32	霊仙寺遺跡	道路改良	霊仙寺地先	溝(中世)	須恵器、土師器、中世陶器	74	橋本	
継	手 原 遺 跡	倉庫建設	手原7丁目829,830,831	竪穴柱建物・土壇・溝(奈~中世) 井戸(平)	須恵器、土師器、灰陶器、瓦、鉄器、黒色土器		近藤	93~継続

遺構では、下記の略語を用いた。

(縄) 縄文時代、(弥) 弥生時代、(古) 古墳時代、(飛) 飛鳥時代、(白) 白鳳期
(奈) 奈良時代、(平) 平安時代、(鎌) 鎌倉時代、(室) 室町時代、(江) 江戸時代
(明) 明治時代 また、時代が特定できないものについては古代・中世等と表わすことがある。

① 辻遺跡

調査地 栗東町大字辻比江田467・2・470・1・470・2
調査期間 1992年11月25日～1993年4月9日
調査面積 1,000㎡



調査地位置図

辻遺跡は、野洲川西岸に位置する縄文時代から近代に至る複合遺跡である。中でも、古墳時代に該当する集落は、堅穴住居の密度が高いことが知られる。本調査地北接地点でも、堅穴住居や旧河道、中世の掘立柱建物等が確認されている。

今回の調査では、堅穴住居2棟、掘立柱建物・土壇状遺構・ピット・溝などが、須恵器・土師器や黒色土器等を伴って確認された。

以下時期別に略述することとする。

古墳時代

古墳時代の遺構には、堅穴住居(SH)が2棟ある。いずれも削平著しく、規模等明らかではないが、方形プランを成している。

SH-01は、残存壁高5cmと遺存状況は悪く、中心部は中世の溝により破壊されているが、7m×7.5mの規模を測る。東辺には、造り付けカマドを据えている。上屋は4本柱により支えられている。出土遺物には、提瓶やへら記号をもつ土師器小形壺や、滑石製紡錘車が出土した。6世紀の所産と考えられる。

SH-02も削平を受け、詳細は確認できな

かった。規模は一辺4mと思われる。床面から、須恵器の高杯が出土し、6世紀初めに相当する。SH-01に先行するものである。

中世前期

当該期の遺構には、溝(SD)や掘立柱建物(SB)、ピット(SP)などが存在する。

SD-01は、調査区内をL字状に巡り、SD-02と併行する。幅は0.8m、深さ0.4m程で、埋土は2～3層よりなる。出土遺物には、黒色土器等がある。黒色土器は、低い高台が設けられており、13世紀前半に属するものである。

SD-02・03からは、10世紀と考えられる緑釉陶器が出土している。これらの溝は、調査地西側を流れる今井川に向かうと思われる。

掘立柱建物は、2棟確認される。建物方向は、SB-01はN-58°-W、SB-02はN-53°-Wであり、北接調査地にて検出された中世初期の掘立柱建物と、方位はほぼ一致する。

その他にもピットを多数検出したが、建物としてのまとまりは把握できなかった。

出土遺物は、SB-01の柱穴より黒色土器、SB-02の柱穴からは、褐色系での字口縁の土師皿や黒色土器等が出土し、他のピットからは、灰釉陶器などが出土している。

中世以降

時期は特定しえないが、L字状の溝や掘立柱建物の廃絶後、現在の水田地割に一致する小溝群が形成されていった。小溝群からは、土鍾などが出土した。(藤岡)



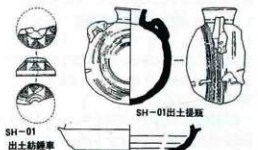
調査地全景



提瓶出土狀況 (SH-01)



灰釉陶器出土狀況 (SP-01)



SH-01出土提瓶

SH-01

出土紡錘車

SH-02出土高杯

SD-03出土綠釉陶器



SD-01出土黑色土器



SD-03出土綠釉陶器

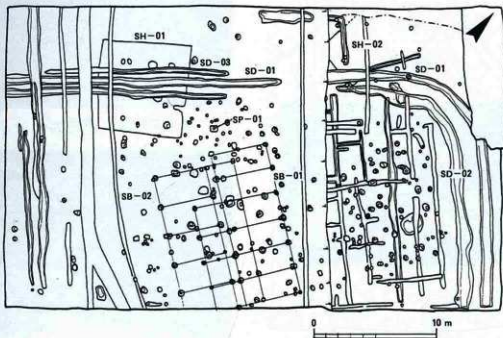


SP-01出土灰釉陶器



0 10 CM

出土遺物實測圖



調查地遺構圖

② 高野遺跡

調査地 栗東町高野下戸別当573-5

調査期間 1992年9月16日～9月24日

調査面積 60㎡

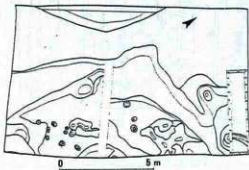
高野遺跡は古墳時代前期を中心とする竪穴住居跡がまとめて出土する遺跡として知られている。本調査区の北隣での調査でも、古墳時代初頭の竪穴住居2棟が検出されている。

今回の調査では、古墳時代前期の流路、および流路堆積後の耕作痕がみつかった。

流路は西側肩部分のみの検出であるが、南から流れ、調査区内で東に向かって屈曲している。流路の底は凹凸がみられる。流路内からは、古墳時代前期の壺・器台が出土してい



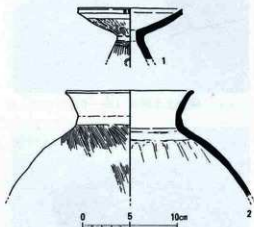
調査地位置図



調査地遺構図

る。

今回の調査では、遺物を含む流路の出土は、高野遺跡における自然地形と古墳時代前期の集落のあり方を考え得る資料である。(雨森)



流路出土遺物実測図



耕作痕完掘状況(南西から)



流路完掘状況(北東から)

③ 高野遺跡

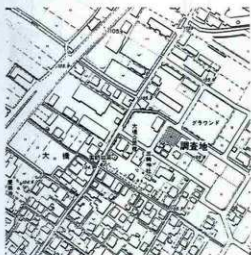
調査地 栗東町大字大橋4丁目316

調査期間 1992年12月18日～23日

調査面積 153㎡

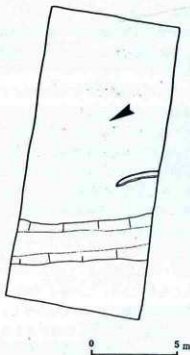
高野遺跡の中でもこの字大橋地域は、区民グラウンド周辺を境にして大きく2分される。

地図中央部東寄りにある「グラウンド」より北側の部分は、過去の調査によれば、竪穴式住居や流路といった古墳時代と推定しうる遺構が確認されている。しかし南側部分では、南下に従ってあらい礫層が入り込んでおり、この部分での明白な遺構、また遺物の採集はなかった。附近は小規模の開発が多いため全体の把握には時間がかかるが、北から南にかけての土層の変化と、グラウンドを目安とすればその北には古墳時代、南には礫層と、その合い間をぬって若干の中世・掘立柱建物が見られるということになる。



調査地位置図

本調査地は、このグラウンドに西接する場所にあり、自然流路1本を検出した。わずかに須恵器片2点を出しており、古墳時代のものと推定している。(橋本)



調査地遺構図



調査地全景

④ 高野遺跡

調査地 栗東町大字大橋4丁目304

調査期間 1992年7月2日～20日

調査面積 315㎡

本調査地では竪穴式住居1棟、暗渠排水溝数条と性格不明ながら中世のピットを検出している。

竪穴式住居は確認できる1辺の長さ7mを越えるもので、柱穴の位置などから正方形のプランと考えられる。また後世の削平を受けており、遺存する深さは20cmほどであった。

床下遺構は、これは削平のためとは思われないが、明白なものではなかった。この床面の住居ほぼ中央部に直径30cm、厚さ4cmで炭化物の混入も見られる被熱した部分があり、炉跡と考えられる。

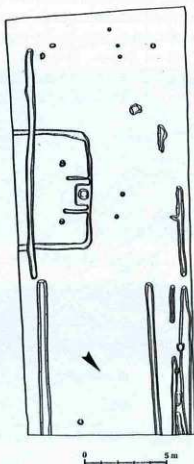
壁面沿いには周溝が巡っており、比較的しっかりしたものである。この溝は「間仕切り溝」とつながって土壌を守るかの様な形をとっている。「間仕切り溝」とは類例を見る限り、文字通り住居内の空間区分を主目的と考えられるものである。この性格を重視するならば、土壌を居住空間から離すため、区画するためのものと推察でき、土壌の性格も祭祀関連の

ものか、という想定も成り立つ。

しかしながら、今回の「間仕切り溝」は、壁面の周溝と連結して、水を落とす様になっており、一般に言われるところの「間仕切り溝」とは性質をたがえている様である。またこの溝が囲む土壌は長方形のプランの中に円形のプランを持つもので深さ50cm、底に3つほどの石が見られたがこれが故意に置かれたものかどうかはわからない。土壌の中からは古墳時代初期にあたる器台が1点でており、これで時代が特定できる。この土壌に関しては住居内によく見られる「貯蔵穴」と呼ばれるピットとしか言えず、時期が早いことも相まってその目的は不明である。



調査地位置図



調査地遺構図

特異な形態を持つ住居であるが、90年度高野遺跡の調査によれば、近距離にある遺跡においても竪穴住居を検出しており、当地周辺の今後の調査に類例を期待する。

ピットと暗渠排水溝は時期の特定はできないものの中世、ほぼ同時期と考えている。これらも削平が著しく、残存する深さが3～5cmで、底にわずかながら樹皮による樋の跡が見られた。
(橋本)



中世・暗渠排水溝



作業風景



土壌内土器出土状況



竪穴住居全景

⑤ 高野遺跡

調査地 栗東町大橋7丁目636-1他

調査期間 1993年2月22日～3月17日

調査面積 100㎡

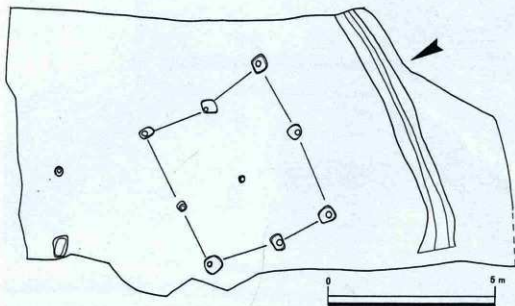


調査地位置図

本調査では溝・掘立柱建物、ピットを確認した。溝は幅70cm、深さ30cm程度を計る。溝内からは7世紀半ば頃とみられる須恵器（杯身または杯蓋）の破片が出土した。この破片は割れ口のすべてが角を欠い、磨滅している。

掘立柱建物は2間以上×2間の総柱建物である。桁行5m、深行3.9mの規模をもつ東西建物で、方位に関しては溝と平行している。建物を構成する柱穴からは時期が判明するに足る遺物は出土しない。

溝の存した時期も疑問がのこるが、本調査で確認された遺構は7世紀半ば頃である可能性がある。（清水）



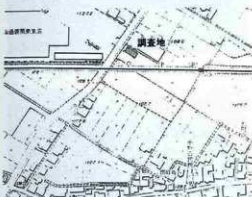
調査地遺構図

⑥ 高野遺跡

調査地 栗東町大字大橋7丁目644

調査期間 1992年7月22日～29日

調査面積 131.75㎡



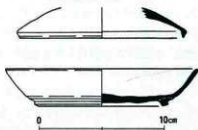
調査地位置図

調査地は、古墳時代前期の集落遺跡として知られる高野遺跡の南東端あたり、奈良時代を主とする手原遺跡に接した位置でもある。

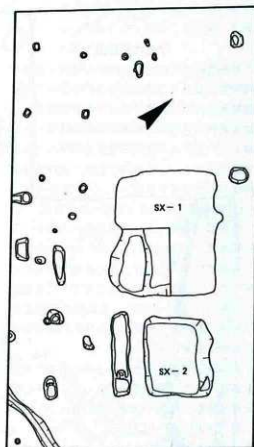
耕作土直下（標高約106.8 m）から遺構を検出した。SX-1・2は、近世の土取り穴と考えられる深さ約50cmの土壌で、そのブロック状の埋土からは近世の瓦や陶磁器片、奈良時代（8世紀前半）の須恵器片、古墳時代の須恵器や土師器の破片などの様々な遺物が出土した。その他の遺構は、溝・土壇・柱穴が存在するが、調査地が狭いためその性格は把握し得なかった。それらの時期は、埋土の状況から中世以降のものと考えられる。（佐伯）



調査区全景



SX-1 出土遺物実測図 S=1/3



遺構平面図

⑦ 岩畑遺跡

調査地 栗東町大字林314-1

調査期間 1992年 7月22日～8月12日

調査面積 210㎡



調査地位置図

岩畑遺跡は時代的にも多様な遺構・遺物を残す複合遺跡として知られている。中でも古墳時代集落址は隣接する辻・高野遺跡等と共に大規模な集落群（野洲川左岸集落群）を形成している。その生成・発展は以下の3画期で説明される。(1)集落群の生成（高野遺跡の形成〈庄内中相併行期〉）、(2)集落群の拡大（辻・岩畑遺跡の形成〈布留古相併行期〉）、(3)集落群の膨張（辻・岩畑遺跡への集中〈TK85以降〉）。ただし、(1)から(2)への変化は左岸集落群内での動きとして説明し得るのに対して、(2)から(3)へのそれにはすでに指摘される様に（伴野：1993）、当該期の野洲川流域全体の動向をも視野に入れた広い視点からの検討が必要とされよう。

今回の岩畑遺跡調査では2棟の竪穴住居他が確認された。遺構はいずれも床土直下の黄灰色砂質粘土層上（標高：108.90m）にある。

竪穴住居（SH-01・02）

いずれも造り付けカマドを有する住居である。カマドの分類基準には様々な試論が提出されているが、住居の掘り込み工程の中に組み込まれているもの（B類）と掘り込み工程とは別工程のもの（A類）の2類にまず大別するのが実態に則している。SH-01は前者、



調査区全景（W方向ヨリ）



SH-01（S方向ヨリ）



SH-01カマド



SH-02（S方向ヨリ）



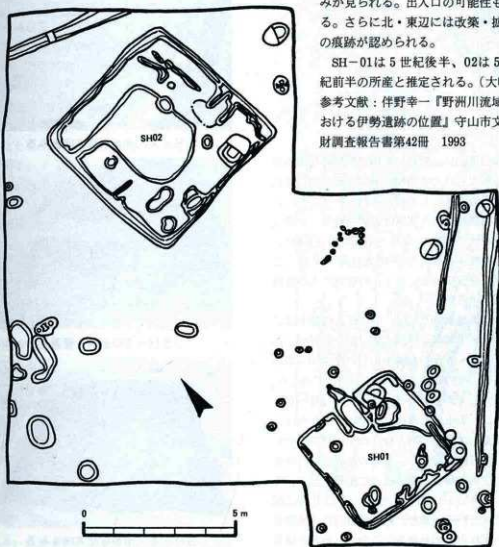
SH-02カマド

02は後者に含まれる。以下、各々の住居の概略を記述する。

SH-01：一辺4mの方形住居で、北辺に造り付けカマドを付す。カマドの東隅には円形状の屋内土壇（径70cm）を穿つ。上屋は四支柱構造を取り、四周には壁溝（幅15cm）がめぐる。床面の踏みしまりは認められない。

SH-02：一辺5.4mの方形住居で、東辺に造り付けカマドを付す。カマドの南隅には方形形状の屋内土壇（0.6×1.0m）を穿つ。上屋は四支柱構造を取り、四周に壁溝（幅20cm）がめぐる他、南辺沿いに楕円形の浅い掘り込みが見られる。出入口の可能性もある。さらに北・東辺には改築・拡張の痕跡が認められる。

SH-01は5世紀後半、02は5世紀前半の所産と推定される。（大崎）
参考文献：伴野幸一『野洲川流域における伊勢遺跡の位置』守山市文化財調査報告書第42冊 1993



⑧ 岩畑遺跡

調査地 栗東町大字林字高丸307-1
調査期間 1992年6月9日～9月4日
調査面積 800㎡



調査地位置図

岩畑遺跡は、野洲川左岸自然堤防状蔽高地上に形成された古墳時代前期から中世以降に至る複合遺跡として周知されている。

今回確認された遺構は、古墳時代（Ⅰ期）、白鳳時代（Ⅱ期）、奈良～平安時代（Ⅲ期）、鎌倉時代（Ⅳ期）、江戸時代以降（Ⅴ期）に大きく分けられる。以下、時期別に主な遺構を紹介する。

Ⅰ期の遺構としては、竪穴住居11棟をはじめ、溝・土壇等が存在する。竪穴住居は、おおむね4～6mの規模をもち、深さ20～70cmである。屋内には、炉もしくはカマドをもち、貯蔵穴と考えられる土壇をもつ。SH-6と12には、炭化した壁材や柱の残骸がみられ、焼失もしくは、不用となった住居材を燃やしていた可能性がある。土壇の配置では、炉をもつ住居の場合、通常南辺に配置させているものが多いが、SH-6とSH-9は北辺に配置させている。また、土壇の周囲には砂礫敷がいずれも認められる。このことから2棟が



調査区南東から北西方向をみる



SB-4・北から南方向をみる



SH-2の土壇と壁溝



SH-4・南から北方向をみる

同一の集団であった可能性が考えられる。また、その2棟と同時に存在していたと思われる住居としてSH-7とSH-5が存在する。これら2棟の住居は、他の住居と比較して、掘り込みが浅いことや、一般によくみられる4本柱の柱穴ではない(3本柱穴の可能性ある)点等、共通点がみられることから、それぞれが2棟1組の単位で構成していたことが想定できる。一方、カマドをもつ住居は、可能性のあるものを含めて4棟(SH-3・5・8・11)存在する。その内SH-4は、L字状に煙道が屈曲するカマドをもつ。

II期の遺構ではSH-2のみである。明確な柱穴は存在せず、南辺西寄りにカマドをもつ。

III期の遺構では、5棟以上の建物が確認されている。柱穴から時期を特定できるような遺物が出土していないため、周囲の調査結果と埋土等の関係を照らし合わせれば、奈良時代の建物と平安時代前半頃の建物が存在していたと思われる。奈良時代の建物では、SB-4・7、平安時代の建物ではSB-1・5・6等が想定できる。

N期では、SB-2とSB-3が存在する。いずれも調査区外であったり、後世の土壌に切られているため、全体は明確ではない。しかしSB-3は、ほぼ栗太郎条里に沿った4間×3間の建物であると考えられる。

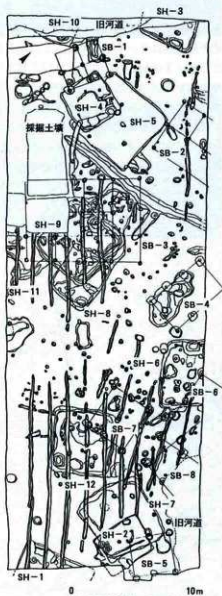
N期と考えられる遺構としては、耕作痕、採掘土壌、旧河道等がある。採掘土壌は、瓦の原料である粘土を採った跡ではないかとされている。

今回の調査では、竪穴住居に代表されるように古墳時代の遺構が中心を占めていた。なかでもL字状に煙道が屈曲するカマドの存在は渡来人との関連を考える上で注目すべき遺構である。同様なカマドが存在する遺跡をみていくと、渡来人の存在を証明するかのように朝鮮半島から搬入された土器や、それを真似てつくったと思われる土器が存在することが多い。栗東町の辻遺跡や和歌山県田屋遺跡

はその一例である。また、岩畑遺跡では通常の集落と比較して鉄製品の出土量が多い。このことも渡来人による進んだ技術の導入による結果であったことが想定できる。

以上の要素は、岩畑遺跡において在地集団の中に、渡来人がどのような位置を占めていたかを追求していく上で重要なことである。

(近藤)



調査地遺構図

⑨ 岩畑遺跡

調査地 栗東町林字高丸311-1

調査期間 1992年10月21日～1993年4月2日

調査面積 1,587㎡

岩畑遺跡は、野洲川左岸微高地上に位置する古墳時代の集落跡である。昭和58年の高野神社南側の区画整理に伴う調査をはじめ、数多くの調査が実施され、数100棟の竪穴住居等が発見されている。集落は、5世紀を盛期として、4世紀から7世紀にかけて営まれ、中心部では竪穴住居が複雑に重複している。また、微高地の頂部には、前方後方形周溝墓を含む墳墓群が検出され、出土遺物においても初期須恵器、滑石製品、多量の鉄製品など、通有の集落と比べて抜きん出た特徴がみられ



調査地位置図

ることから、地域の中心的な集落であったことが窺われる。

今回の調査は、高野神社の南約250 mの地点で、同様の集落の広がりが見込まれていた。

検出された遺構は、5世紀から6世紀にかけての竪穴住居18棟、溝、土壇等と、平安時代後半の土壇、ピット群である。遺構面は、東から西へ緩やかに落ち込んでおり、低地となる部分には遺構が少なく、新しい時期の住居は東側の微高地上に集中する。低地は徐々に埋まったと思われ、灰色の砂質土あるいは粘質土が平行堆積する。SD01は、堆積途上の低地に流入するものであろう。

住居群は、5世紀から6世紀初めに中心を置き、切り合い等からおおよそ4時期に分ける事ができる。

出土遺物は、古式土師器、土師器、須恵器等の土器類が大半を占め、須恵器には、初期須恵器が含まれている。鉄器等の鉄製品の出土の他、SH01からは、鉄滓数点と鑿か鉄斧



東半全景



西半全景

等の工具によると思われる打ちかき痕を残す
枕状の砥石が出土し、鉄鍛冶の可能性が考え



SH10・SH09

られる。また、SK01からは、滑石製の琴柱
形石製品が出土している。(平井)



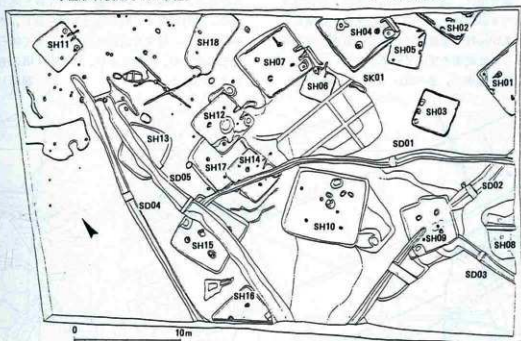
SH07



琴柱形石製品SK01出土



SH07かまど



調査地遺構図

⑩ 中村遺跡

調査地 栗東町御園字谷2055-1

調査期間 1992年7月21日～8月10日

調査面積 456㎡

中村遺跡は、これまでに団体営園場整備事業や造成工事に伴う、数次に及ぶ調査が実施された。それにより、遺物では縄文時代から、遺構では古墳時代から近代に及ぶ、複合遺跡であることが確認された。

特に園場整備事業に伴う調査では、堅穴住居・掘立柱建物・明治期頃の瓦窯等が検出され、平安時代に盛隆した遺跡とされた。

遺跡は、現表相地形分類によると、西に金勝川、東に丘陵が連なる谷底平野に位置する。

平安時代の中心部は、丘陵より派生する舌状台地に占地し、周囲は金勝川旧河道と氾濫原に影響される谷状地形であった。当調査地は、中心部より離れた、尾根から台地地形に変る微高地上に位置する。

調査地は、調査時点では田地であり、地表より8cmは耕土、その下部に床土が堆積し、地表20cm程で遺構面にいる。遺構は攪乱により一部破壊を受けている。

検出遺構は、溝(SD)2本、土壇(SK)

2基やピットの他、排水路7本がある。このうちSD-01は、東では幅1.5m、深さ14cm、西では幅1.3m、深さ25cmを測り、東から西に傾斜する。SD-02は、西は幅64cm、深さ8cm、東は幅20cm、深さ5.2cmで、これも東から西に傾斜し、方位もSD-01と同一である。埋土はいずれも砂質土である。

SK-01は、長径1m、短径45cm、深さ12cmの楕円形である。SK-02は攪乱で破壊されていて、一部を確認したに留まった。

ピットは、直径約20cm～30cmの規模であるが、掘立柱建物としてのまとまりは見受けられなかった。

排水路は、楡皮と配石の暗渠と開渠の3種類あり、調査区周辺の発掘でも多数検出されている。これらは、重複の関係から、楡皮を用いた暗渠が最も古く、次に配石の暗渠と開渠が設営される。時期については、いづれも近世以降の所産と考えられる。

出土遺物には、SD-01下層から出土した瓦器碗がある。器底部の高台と一部口縁の破片が残る。口縁は、内部に一条の沈線を巡らせる。高台は低く、断面は三角形を呈し、やや外反する。暗文や調整は磨滅していて明らかではないが、形態により、12世紀中頃のものと思われる。(藤岡)



調査地位置図



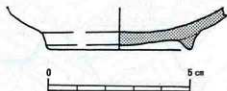
調査地全景



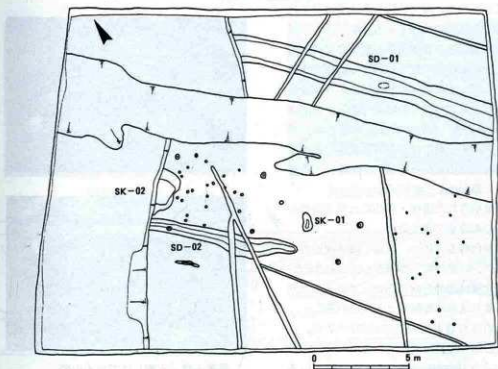
SD-02



SD-01



SD-01出土遺物実測図



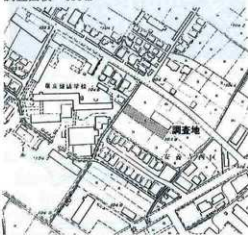
調査地遺構図

⑪ 狐塚遺跡

調査地 栗東町安養寺7丁目618,619

調査期間 1992年5月19日～6月19日

調査面積 690㎡



調査地位置図

本遺跡は野洲川が主として形成する扇状地に位置しており、縄文時代から中世に至る複合遺跡として周知されている。

今回の調査区は狐塚遺跡の東端に位置している。付近では近年数次にわたる調査が実施されており、本調査区の東隣においては全長32mの帆立貝式古墳（狐塚3号墳）が検出され、「木製埴輪」の出土で注目を集めた。また、北側の隣接地では奈良時代前半の井戸が検出され、その底から「土」・「土」・「土」と墨書された土器が出土している。

今回検出された遺構・遺物には縄文時代から中世のものまで含まれる。

縄文時代のものには、石鏃、縄文晩期の土器があり、いずれも包含層からの出土である。この包含層は南西方向に向かって広がる沼沢地状の落ち込みの堆積層と考えられる。

遺構のうち最も古いものはSD-7で、古墳時代初頭の遺物を含んでいる。

SD-8・10はSD-1～3にきられているが時期の判定できる遺物を含んでおらず、時

期は不明である。

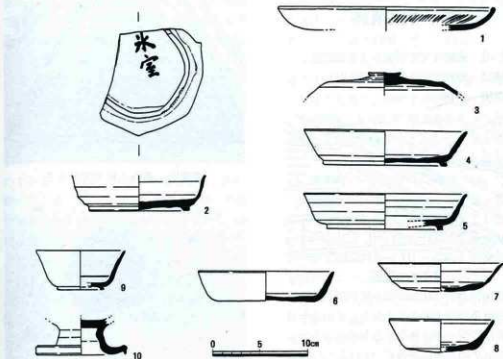
SD-1～6は、砂を埋土とする溝で、いずれも奈良時代の遺物を含んでいる。とくに遺物が集中していたのはSD-3で、幅1m、深さ15cmの溝である。出土した遺物は平城Ⅱを中心とする時期であると考えられる。須恵器杯身のうち1点には、「水室」と墨書されたものがあった。

調査区北西側は、砂を埋土する溝、およびこれに先行する不整形の落ち込みが検出されたが、時期は不明である。

今回出土した墨書土器の字句「水室」は、地方の集落跡から出土したものとしてはかなり特異なものであった。水室は『延喜式』には山城国をはじめ10箇所が記載されており、滋賀県では志賀郡に設けられていた。狐塚遺跡と水室との関係を考えることは難しいが、本調査区周辺では、ほかの墨書土器も出土しており、水室となんらかの関係があった役人層がいたものと考えられる。（雨森）



墨書土器「水室」はでたものの
現場は…暑かった。－6月の作業風景



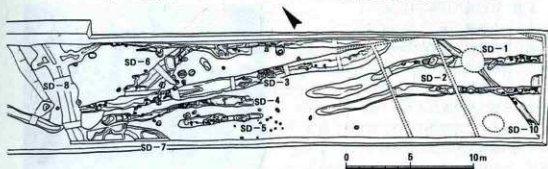
SD-3 出土土器



調査区南東側



調査区全景（北東よりみる）



調査地遺構図

⑫ 手原遺跡

調査地 栗東町大字手原 5 丁目1221他

調査期間 1992年10月 5 日～12月24日

調査面積 約790㎡



調査地位置図

手原遺跡は、JR草津線手原駅周辺に存在し、近世東海道の道筋にあたる。このあたりは、湖南平野一帯に残存する条里とは異なった正南北方向の地割が残存していることから、従来より古代寺院や官衙の跡が想定されている。

今回確認された遺構は、掘立柱建物、井戸、溝、耕作痕等があり、时期的には大きく4時期に分けられる。

I 期 奈良時代後半から平安時代中頃（8世紀後半～10世紀前半）

II 期 平安時代後半から鎌倉時代前半（11世紀前半～12世紀後半）

III 期 鎌倉時代中頃から室町時代前半（13世紀前半～14世紀）

IV 期 江戸時代以降（17世紀～）

以下、主な遺構について記述する。

掘立柱建物は、一部のみ検出したものを含めると10棟以上存在する。I 期のものは、方位からはほぼ磁北方向のもの（SB-1）と、磁北から西へやや振れるもの（SB-2・4・5）がある。この調査区では、前者は、後者より古い遺構であると考えられる。SB-4・5は、いわゆる「溝もち」と呼ばれる掘り方をもつ。II 期と考えられる建物にSB-3が



調査区・西から東方向をみる



SE-1 東から西方向をみる



SB-1 北から南方向をみる



SB-4・5 付近作業風景

存在する。主軸は、磁北より大きく東へ振れるものである。Ⅲ期の建物では、SB-6・7の2棟が存在する。ほぼ正南北地割に沿った建物で、2棟がし字状に配列されている。

SB-1は、不整形形状の平面形を持つ井戸で、規模は長径4m、短径は3.4mである。深さは検出面から3.8mで、井戸枠は1m下げた地点で確認した。そのつくりは、幅25cm前後の板を9～10段に重ねて四方に組んだものである。注目すべき遺物に墨書土器、斎串、燃えさし等があり、井戸を廃棄する際に祭祀行為が行なわれていたことが想定できる。時期は、Ⅰ期の前半頃と思われる。

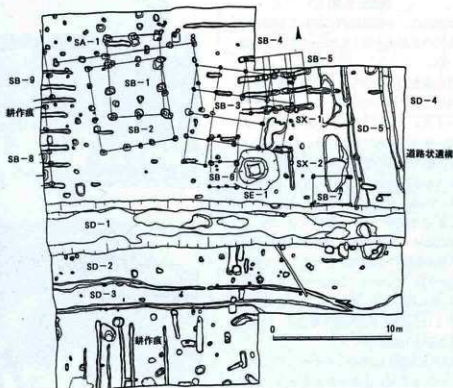
SD-4・5は、SB-2・4・5とはほぼ同一軸にのびる溝で、Ⅰ期と考えられるものである。2つの溝は、1.3～1.5mの間隔をもち併行して存在することから道路状遺構になる可能性をもつ。

SX-1・2は、土塊状のくぼみをもつも

ので、SX-1からは、多量の土器が廃棄した状態で出土している。時期は、SB-1、SE-1とはほぼ同時期に想定される。

Ⅲ期に含まれる溝として、SD-1～3が存在する。SD-1は、幅3.2～4.4m・深さ60～80cmの大溝で、ほぼ正南北条里に沿ったものである。この溝は、位置を少しずつずらしながらも近代まで存在していたことが考えられる。SD-2・3は西南隅で1本になる溝で、SD-1とはほぼ併行して存在する。

今回の調査区では、当初中世(Ⅱ・Ⅲ期)の遺構が主体をなすものと思われていた。しかし、SD-1より北側では8～10世紀を中心とする遺構がまとまって存在し、当該期の遺構がさらに西へ続くことがわかった。とくにSE-1から出土している墨書土器等の存在は、手原遺跡が官衙の要素をもつ遺跡であることを補強するものである。(近藤)



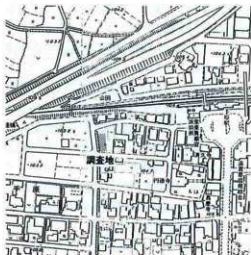
調査地遺構図

⑬ 手原遺跡

調査地 栗東町手原 4丁目1190

調査期間 1992年 7月2日～8月11日

調査面積 245㎡



調査区全景

本調査区は、手原遺跡内においても過去に白鳳時代の瓦が多く出土している地区に近接している。

今回の調査で見つかったものは、掘立柱建物2棟以上、瓦溜りである。

SB-1は、桁行7間以上、梁行2間の南北棟で、東側・南側に庇がつき、規模が大きい、ほぼ磁北方向の建物である。柱掘り方は隅丸長方形もしくは楕円形で、長辺（もしくは長径）は約1mである。柱穴は北側にいくにしたがって浅くなっているが、地山の土質の変化によるものであろう。遺物は底列にあたる柱穴から、7世紀末頃と考えられる須恵器杯蓋片が出土しており、建物の年代もおおよそその時期に当てはめることができよう。

SB-2は、SB-1と柱筋を揃えるもので、2間×1間以上の建物である。

瓦溜りは調査区南西隅で見つかった。出土した瓦は、複弁蓮華文軒丸瓦2点、および平瓦、丸瓦で、ほかに須恵器杯蓋1点が出

土した。軒丸瓦のうち1点は、手原遺跡の東約2kmに存在する栗太郡衙推定地（栗東町岡遺跡）で出土する軒丸瓦や、手原遺跡で従来より見つかった軒丸瓦と同じタイプの瓦である。須恵器は8世紀前半代のもので、瓦が投棄された時代を示しているものと考えられる。

ほかの遺跡としては、中世の溝・土壌があり、信楽焼などの遺物が含まれている。

従来より手原遺跡で実施されてきた調査で検出されている古代の建物群は、8世紀後半以降の総柱建物を主体とするものであった。今回は瓦の集中する地区に近接した地点での調査で、白鳳寺院と並行する時期と考えられる大規模な建物がみつかり、寺院と関連の深い遺構であると考えられる。とすれば、SB-1などの建物は、寺院を構成する僧坊や雑舎などの建物か、もしくは寺院を建てた氏族の館である可能性が考えられるのである。

（雨森）



SK-2



作業風景



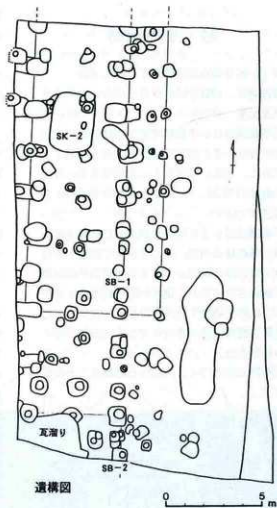
SB-1 柱穴



調査区全景



瓦溜り出土 軒丸瓦



遺構図



瓦溜り (SK-1)

⑭ 手原遺跡

調査地 栗東町手原 7丁目836, 837

調査期間 1992年10月5日～1993年3月6日

調査面積 907㎡

手原遺跡は、JR草津線手原駅周辺に位置し、付近一帯には真南北方向の地割がのこっている。また、手原駅より南西側には、古瓦の散布が知られていることから、寺院跡が想定されてきた。

本調査は、手原駅の北側にあたる地点である。調査地の西側、および東側に近接する地点では、奈良時代から平安時代前期の建物群が検出されており、建物が総柱建物を主体とし、柱筋を揃えて並ぶ特徴をもっていることから、官衙関連の建物群である可能性が考えられてきた。

今回の調査では、白鳳時代に埋没した溝を



調査地位置図

はじめとして鎌倉時代の遺構・遺物が出土した。

白鳳時代に埋没した溝は、手原の地割とは異なり、北を約45度西に振るものである。上層から平瓦・丸瓦・土師器杯身が出土している。

奈良時代から平安時代前期の遺構は、掘立柱建物7棟等が出土した。T-2から検出されたSB-1は特に大型の東西棟で、5間以上×2間で南面庇のつくものである。柱掘り方は隅丸方形で一辺が約1.2m、柱の太さは約20cmである。SB-2はSB-1の南側でみつかった、3×2間の東西棟である。SB-1と同時期と考えられる。

T-1では5棟の建物がみつかった。SB-3は7×2間の、桁行きの長い南北棟である。SB-4は5×2間の南北棟、SB-5は4×2間の東西棟である。SB-6は3間以上の東西棟で、建物の方位は北をやや西に振って



SE50作業風景



SB-5作業風景

いる。SB-7は柱掘り方が一辺約1.2の大型の隅丸方形で、深い。これは調査区の西側の隣接地でみつかった奈良時代の倉庫跡と類似しているもので、同様の建物であると考えられる。

T-1の北端では幅5m、深さ0.6m、長さ1.8mの長楕円形の遺構がある。平安時代の遺物が含まれている。

鎌倉時代の遺構は調査区全体から検出された。T-1では13世紀の建物群が主体である。建物のほかには区画のためと考えられる溝、井戸、土壇などが検出された。調査区北西隅では墓と考えられる遺構SX-8が検出された。プランは不整形で断面は皿状である。分厚い炭化物が敷かれて、焼土が多く存在しており、土師器皿、青磁碗2点が出土した。

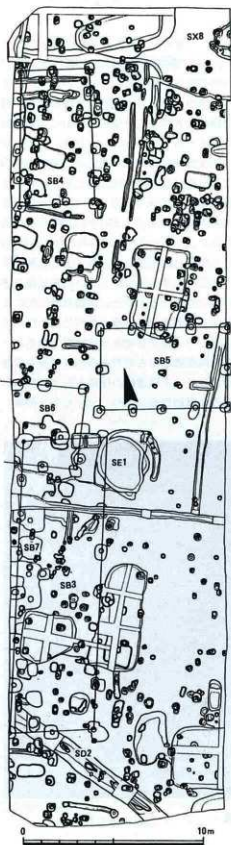
T-2では13世紀後半～14世紀前半の遺構・遺物が出土した。この地区で特徴的であったのは、方形の土壇が多く出土したことである。とくにSX-51は底に石を敷き詰めるもので

あり、ここでは軒丸瓦1点が転用されていた。T-2の南西隅では井戸が検出された。井戸は方形の縦板を横向きの棧でとめるものである。上層からは、黒色土器、土師器のほか須恵質練鉢、古代の石帯などが出土し、枠内からは漆碗・皿・舟形代が出土した。

今回検出された古代の遺構は、従来より調査されてきた総柱建物群の中にあって、やや異質の建物群であった。とくにSB-1は庇付きの大規模なもの、SB-7は桁行きの長い建物と、一揃の集落ではみられないもので、しかも整然と配置されている。また、建物群の中に近隣で多く見つかった倉庫様の建物がみられないことから、建物が機能別にまとまって配置されていることがわかった。これは、この一帯が官衙的な建物群であるという蓋然性を強めるものであろう。今後の調査検討により、手原遺跡の性格も徐々に明らかになると思われる。(雨森)



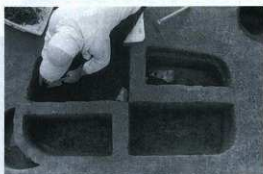
調査区全景写真



SB-7 柱穴



土師皿が出土した土坑

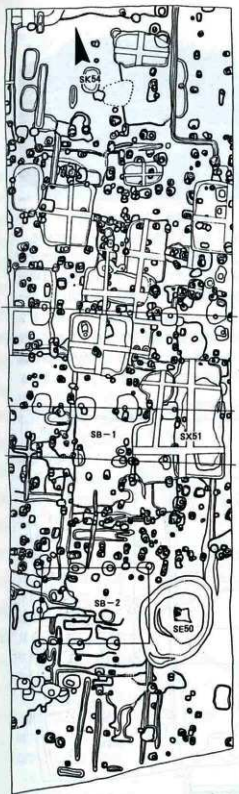


炭化物が敷かれていた土坑



SX-8 遺物出土状況

◀ T-1 遺構図



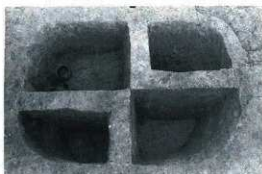
T-2 遺構図



SB-1 柱穴断面



柱穴底より完形の土師皿が出土



SK-54



SE-50

⑮ 椿山池ノ浦遺跡

調査地 栗東町安養寺6丁目1-44

調査期間 1992年6月3日～30日

調査面積 150㎡



調査地位置図

本遺跡は県内有数の帆立貝形古墳、椿山古墳周辺の遺跡である。

今回の調査では床土直下の淡青灰色細砂層上(標高:104.70m)で掘立柱建物等が確認されている。

掘立柱建物(SB)

梁間2柱間×桁行3柱間の身舎(もや)の北・東に底を持つ建物。柱穴掘り方は径50cmの円形状。11～12世紀の土師皿・黒色土器碗片が出土する。

溝状遺構(SD・SX)

略北方向へ伸びる2条の溝(SD01・02)に浅い落ち込み状遺構(SX03)、幅30cm前後の小溝群がある。

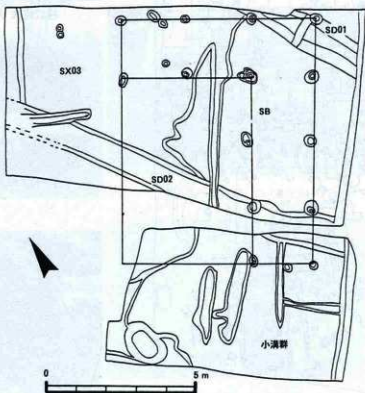
SD01は幅1.2m、深さ60cmを測るV字溝である。SX03は深さ20cm前後の浅い落ち込みで、比較的多くの土器片を包含している。8～9世紀の須恵器片がその大半を占めるが、中に



調査風景(NW方向ヨリ)

庄内併行期の受口状口縁甕も含まれている。

上述した様に、本調査区は椿山古墳の北側に隣接した地点である。今回の調査では同古墳に直接関連を有する遺構・遺物は認められなかった。しかしながら、北方向へ伸びる2条の溝は同古墳周濠と連結するとすれば、後世の周濠利用の一例となろう。今後の周辺調査の検証を待ちたい。(大崎)



⑬ 野尻遺跡

調査地 栗東町大字下鉤字喜楽904-1

調査期間 1992年4月15日～30日

調査面積 250㎡



調査地位置図

野尻遺跡は縄文時代後期以降、各時代の遺構・遺物を残す複合遺跡として周知されている。中でも弥生時代後期～古墳時代のそれには見るべきものがある。

今回の調査地は当遺跡の南西端近くに位置する。遺構は耕土・床土直下の黄灰色粘土層上（標高：97.70m）で確認された。

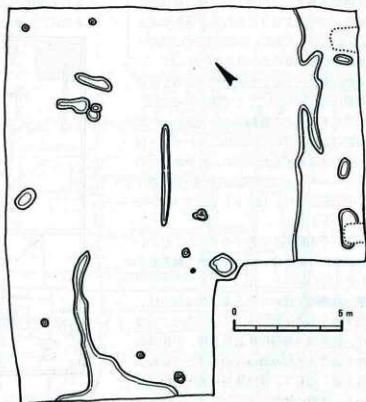
調査区南西端を除きほぼ全域に暗灰色系粘土層の浅い落ち込み状遺構（深さ：10cm）が見られた他、幅40cm前後の溝状遺構や不整円形（径90cm）や楕円形（1.8×0.8m）の土坑状遺構がある。一部に明確な柱穴も見られるが、建物として捉え得ない。上記の各遺構からの出土遺物はわずかに須恵器甕腹片や土師器細片

数点を数えるにすぎず、遺構の時期は特定しがたい。

上述の様に本調査地における遺構密度は必ずしも高いものではないが、その調査成果は野尻遺跡の範囲を把握する上で有用な資料となる。（大崎）



調査地全景（SW方向ヨリ）



⑪ 野尻遺跡

調査地 栗東町大字緒字地京401他

調査期間 1992年4月1日～9月30日

調査面積 5,369㎡

野尻遺跡は、標高1,200 m程の鈴鹿山系から源を発し、琵琶湖へ西流する野洲川が形成した標高100m程を測る扇状地の扇端と氾濫原との境に位置する。過去の調査からは、縄文時代後期から近世にいたる遺構・遺物を確認しているが、その中心は弥生時代末から古墳時代初め、および平安時代末から鎌倉時代初めであることが判明している。また、88年度の調査では、一辺約50mの方形溝で区画された古墳時代の居館跡を発見し、当時の古代豪族を知るうえで重要な知見を得た。

今回の調査は、JR東海道本線栗東駅前土地区画整理事業の第四期工事に伴う発掘調査である。89年度よりはじめた本事業も年度とともに周辺部へと進み、今年度はその北端部・南端部の約23,600㎡がその対象となった。

調査にあたっては、区画整理対象地を前期と後期に分け行った。ここで報告するのは、南端部北半にあたる前期調査分である。

掘削にあたっては、対象地に合わせ1～14のトレンチを設定した。また、対象地の制約からトレンチによっては、それぞれ東・西・南・北・中央部分に分け、12-Nトレンチ・12-Sトレンチとした。

以下、その概要を報告することとするが、その詳細については、また期を改め報告することとした。

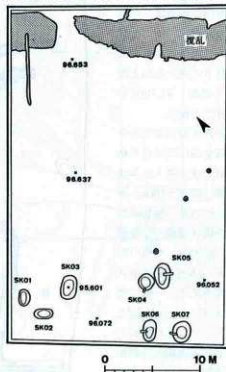
層序 調査地で認められる基本的な層序は、大別すると基本的には次の3層である。上層から、層厚20cm程の現代耕作土層、中世期の遺物を包含する層厚15cm程の黄灰色系粘質土の盛土層、そして、黄橙灰色粘質土の地山層である。遺構の検出にあたっては、この地山層上面で行った。

遺構 検出した遺構は、弥生時代末から古墳時代初め、および平安時代末から鎌倉時代初めの土壌・溝・耕作痕、古墳時代の溝のほか、近世期の井戸状遺構・暗渠排水路などである。今年度も2地点において地震跡を検出した。この地震跡については、通産省地質調査所の寒川 旭氏の指導を受け調査することができた。ここでは、主なトレンチの主要遺構についてその概要を述べることにする。

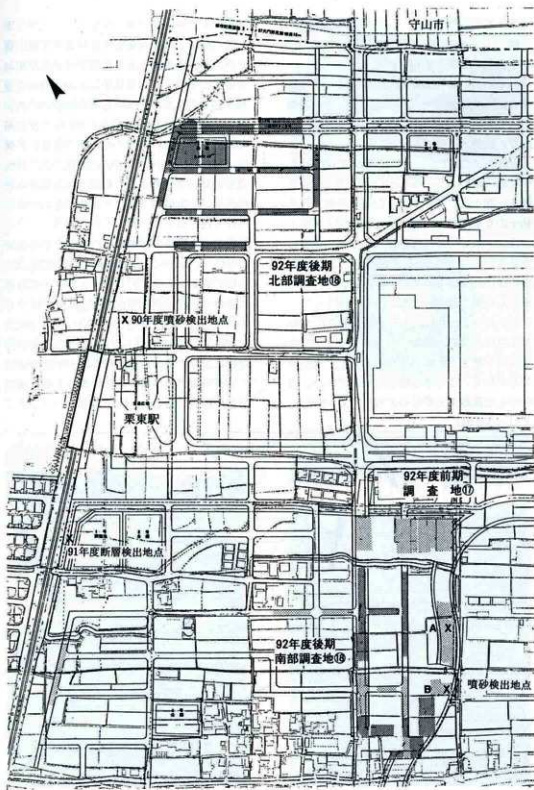
(4トレンチ)

本トレンチでは、黄橙灰色粘質土の地山において、土壌群を検出した。

SK01～SK07 長辺1.8m・短辺0.9m・深さ0.4m程を測る長方形土壌である。SK03～SK07は、SK01・SK02に比べ大型。その後の整地土層である土壌埋土層から、土器細片が出土している。これらの土壌については、速断はできないが、その周辺より耕作痕等の生産に係わる遺構が認められないことを積極的に考えれば、土壌墓である可能性も考えられる。



4トレンチ遺構図



調査地位置図 (1 : 4,000)

(5・6トレンチ)

両トレンチでは、広範囲に広がる古墳時代と中世期の農業用水路を検出した。

5トレンチSD01 幅0.8m・深さ0.1m程を測る古墳時代の東西方向の溝である。その西側は、後期調査の1トレンチ北端部で検出しており、総検出長は100m程に及ぶ。

6トレンチSD01 トレンチ西壁で検出した中世期の溝である。幅1.5m・深さ0.2m程を測る。埋土は、鉄分を含んだ灰色砂層と灰色粘土の互層である。遺物は、砂層部より出土した。トレンチ北端部分において溝と直交した長さ1.2m・幅0.2m程を測る木材と、溝兩岸に直径10cm程を測る軌跡を検出した。溝に架かる小橋と護岸杭と思われる。

6トレンチSD01は、その後の調査において、現在の水田の畦畔に沿った状況で、その延長部を数カ所において検出した。これらのことから、この溝は農業用水路であり、当時の土地区画を示すものと考えてよいだろう。

6トレンチSD01



6トレンチSD02



6トレンチSD01・SD02土器実測図

(10トレンチ)

現代耕作土直下の黄橙灰色粘質土の地山層において、灰色粘土および暗茶褐色粘土を埋土とする土壌・柱穴を検出したが、明確な遺構は認められない。下層遺構の確認のため、トレンチ東側において深さ2.1m程に及ぶ断ち割りを行った。今回の地震跡（噴砂）の検出はこれによる。この噴砂の詳細については、過去の調査を含め寒川 旭氏より玉稿をいただいた。本年報40・41ページを参照されたい。

(11・12トレンチ)

現代耕作土直下の黄橙灰色粘質土の地山層において、6トレンチSD01延長部を検出した。

12トレンチでは、トレンチ北端部・南端部において、6トレンチSD01の延長部を検出している。幅1.4m・深さ0.3m程を測る。特に、SD02とした南端側は、トレンチの土層断面観察によってその形成状況がよく理解された。

これら以外の遺構では、時期の不明な溝や近世・近代の耕作痕などがある。

まとめ 以上、調査の概略を述べた。最後に若干の整理をおこないまとめたい。

（地震跡） 野尻遺跡では、88年度調査において、はじめて11世紀以降の小規模断層を検出した。本調査地では、これまで90・91年度において、噴砂・断層を発見している。新たに今回の噴砂によってその広がりが増え、範囲であることが判明した。時期的にも概ね近世初期の寛文2（1662）年の琵琶湖西岸地震ではないかと推測されるようになった。今後のさらなる資料の増加に期待したい。

（遺跡の性格） 野尻遺跡は、縄文時代後期から近世にわたる遺跡として周知されている。本調査地では、弥生時代末から古墳時代初めと平安時代末から鎌倉時代初めがその中心となる。しかしながらその多くは、中世期および近世期の土地改変により、少なからず攪乱・削平を受けており、その全体像を窺えるものは少ない。今後の調査でその全体像が明瞭になることに期待したい。（猿向）



4 トレンチ作業風景



6 トレンチSD01出土銭貨



6 トレンチSD01発掘状況（北東から）



11 トレンチ噴砂断ち割り状況（北東から）

野尻遺跡では、90～92年度にわたって地震の痕跡が検出された。(P37 調査地位置図) 90年度 (図1)

1カ所で液状化現象の痕跡が認められた。

河床堆積物のⅡ層(最大径8cmの礫を含む砂礫層)・Ⅲ層(最大径3cmの礫を含む砂礫層でⅡ層より砂の比率が大きい)・Ⅳ層(最大径7cmの砂礫層)が堆積し、これを浸食した自然の溝内にシルトが堆積していた。この中のⅢ層で液状化現象が生じ、Ⅰ層を引き裂きながら当時の地表へ向かって噴砂(礫)が上昇していた。噴砂の通り道(砂脈)は幅3cm前後で、砂脈内には最大径3cmの礫も見られた。また、液状化したⅢ層下部には堆積構造が残存しているが、上部(特に砂脈の直下)では、激しい攪乱をうけるとともに、砂脈を上昇できなかった礫が多く取り残されている状態がよく観察できた。液状化現象の発生した時期は不明である。

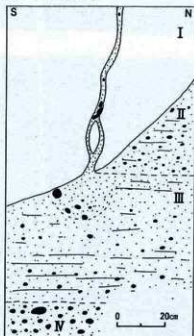


図1 90年度の調査で検出した液状化跡

通産省工業技術院地質調査所 寒川 旭
91年度 (図2)

顕著な正断層が認められた。これは、概ね北東-南西方向に延びており、少なくとも現地表面下3mまで、粘土層を変位させることが確認できた。現地表面下2mまでは、断層面の傾斜はほぼ垂直で、粘土層の変位量は10～11cm程度である。また、地表面下2～3mの区間では断層面の傾斜がわずかに緩やかになるが、変位量には顕著な差がみられなかった。

これに深の状態は

不明であるが、さらに深部のゆる詰まりの砂または腐植土・粘土層が水平方向に流動したため、上位の地層に引張力が加わって生じた正断層と考えられる。

この断層では、平安時代末～鎌倉時代の地層が変位をうけ、江戸時代後半の遺構が断層を削って設置されていた。このため、断層の生じた年代は鎌倉時代～江戸時代中頃までに限定できる。また、このような地層の流動と正断層の発生は激しい地震動にともなって生じることが多く、1662年6月16日の琵琶湖西岸地震の産物である可能性が大である。

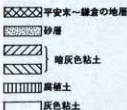
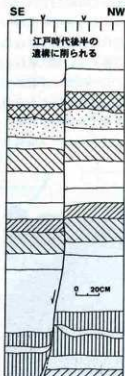


図2 91年度の調査で検出した正断層跡

92年度

2カ所で液状化現象の痕跡が確認できた。

液状化跡A（写真1・2）では最大径3cmの礫を含む砂礫層で液状化が生じ幅2cm（一部では幅10cm）の砂脈内を砂・礫（最大径1cm）が上昇していた。砂脈の先端は、弥生時代後期から古墳時代と考えられる地層下8cmで止まっており、当時の地表面へは砂が噴出しなかったものと思える。

液状化跡B（写真3）は砂礫層（最大径3.5cm）が液状化したもので幅8～9cmの砂脈内を砂・礫が上昇していた。砂脈の最下部が液状化層と途切れていたため、他の位置で割れ目内に砂が上昇し、これが横に広がったものと思える。砂脈下部は礫（最大径5cm）～粗粒砂、中～上部は中～粗粒砂と上位に向かって礫・砂の分級化作用がみられる。これも地表に達せず止まっていたので形成年代は不明である。

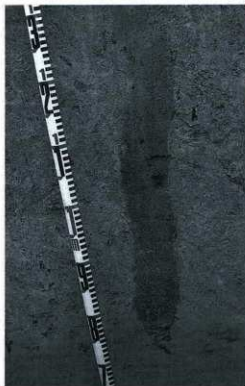


写真2 液状化跡Aの砂脈（写真1の近景）

まとめ

琵琶湖周辺では、中世から近世（多くは1662年）、弥生時代中期中葉、縄文時代晩期などの顕著な地震跡がみられ、湖の形成の歴史や湖国の防災を考える上で、重要な資料となっている。本遺跡での成果はこのような研究に役立つものである。



写真1 92年度の調査で検出した液状化跡A



写真3 92年度の調査で検出した液状化跡B

⑱ 野尻遺跡

調査地 栗東町大字緒字大燈籠73他

調査期間 1992年10月1日～1993年3月31日

調査面積 8,246㎡

今回の調査は、JR東海道本線栗東駅前土地区画整理事業の第四期工事に伴う92年度後期発掘調査である。調査対象地は、区画整理対象地の北端部および南端部南半にあたる。総調査対象地は、12,200㎡である。

調査にあたっては、南端部に1～10、北端部に11～20のトレンチを設定した。また、対象地の制約からトレンチによっては、それぞれ東・西・南・北・中央部に分け、5-Eトレンチ・5-Cトレンチ・5-Wトレンチとした。

以下、その概要を報告することとするが、その詳細については、また期を改め報告することとしたい。

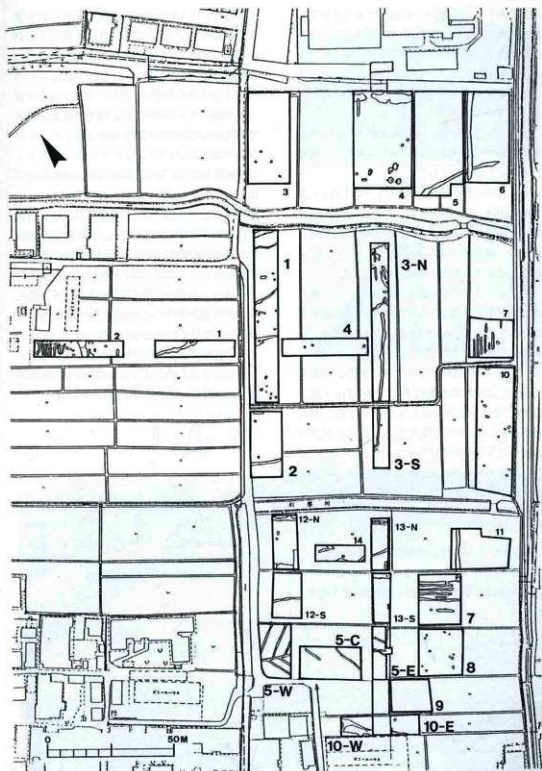
層序 調査地で認められる基本的な層序は、大別すると次の3層である。上層から、層厚20cm程の現代耕作土層、中世期の遺物を包含する層厚15cm程の黄灰色系粘質土の盛土層、そして、黄褐色系粘質土の地山層である。

遺構の検出にあたっては、この地山層上面で行った。しかし、北端部は現代耕作土層直下において、層厚70cmの近世攪乱整地土層が広範囲に堆積していた。この近世攪乱整地土層上面では、暗渠排水路などが確認されたが、地山のそのほとんどは、井戸状遺構によって著しく攪乱を受けており、それ以前の遺構は認められなかった。このため北端部については、この近世攪乱整地土層上面において近世期の遺構の検出に努めた。

遺構 今回の調査は、区画整理対象地の北端部と南端部に位置することから、その様相は大きく異なる。1～10トレンチを設定した南端部では、前期調査と同地区であるためその延長部と思われる遺構を多く検出している。



3-N・3-Sトレンチ遺構検出状況（南西から）



トレンチ配置図（小文字は前期調査 1 : 1,500）

それに対して北端部は、前述のとおり近世期の整地土層のため、それ以降の暗渠排水路・井戸状遺構などのほか、当時の旧地形が窺われる整地状況を観察することができた。

以下、その概要を述べることにしたい。

(1～4トレンチ)

1～4トレンチは、前期調査地のちょうど中心に位置する。そのため、多くの延長部と思われる溝などが検出された。

1トレンチSD01 北端で検出した幅1.5m・深さ0.3m程を測る溝である。埋土は暗茶褐色砂質土・暗灰褐色砂質土・暗灰色砂質土の3層からなる。状況的に前期調査5トレンチSD01の延長部である。総検出長は103m程となる。

1トレンチではこのほか中央部で、少し離れた1基を含め4基からなる東西方向の土壇群を検出した。長辺1.8m・短辺0.7m・深さ0.4m程を測る中世期のものである。

3-NトレンチSD01 トレンチ中央部から南半で検出した中世期の溝である。幅0.7m・深さ0.1mを測る。灰色砂質土単層からなる。南端は3-Sトレンチでも検出され、さらに西側へと折れて2トレンチでもその延長部が検出された。総検出長は、105m程におよぶ。3-Nトレンチではこのほかに、北半で同時期と思われる溝・土壇・柱穴等を検出した。

(5～10トレンチ)

5～10トレンチは、前期調査の南側となる。

5-WトレンチSD01 トレンチ西・南壁で検出した中世期の用水路である。幅1.5m程を測る。

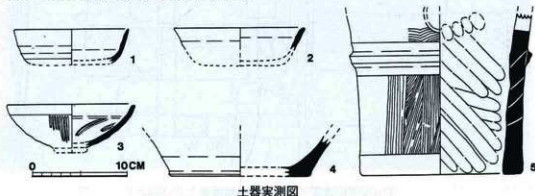
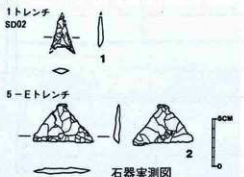
この溝は、7トレンチ北端でも検出している。前期調査6トレンチSD01の溝の延長部と思われるものである。総検出長は、320m程となる。このほか、8トレンチで柱穴群を検出しているが、後世の削平が著しく建物となりうるものはない。10-Wトレンチでは、弥生時代末から古墳時代初めにかけての溝を検出した。

(11～20トレンチ)

前述のとおり、近世以降の遺構以外は検出できなかったことから、ここでは割愛する。

遺物 調査地が北端部と南端部に分かれ、遺構の様相が大きく異なるものの、遺物的には過去の調査と大差はない。弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・中世土器・輸入磁器・近世陶磁器のほか、若干の石器・銭貨がある。その多くは、中世包含層内の二次堆積のもので、概して遺存状況は悪く細片のものが多い。

この傾向は、遺構出土数が少ないこともその一因であろうが、やはりそれは、中世期の大規模な土地改変の結果としてよいだろう。



まとめ 以上、調査の概略を述べた。最後に若干の整理をおこないまとめとしたい。

(遺跡の性格) 本調査地では、弥生時代末から古墳時代初めと平安時代末から鎌倉時代初めがその中心となるものの、その多くは中世期および近世期の土地改変により、攪乱・削平を受けていることを以前報告した。

しかし、調査を重ねるにつれその結果からは、対象地の北側でみられた暗渠排水路は、かつて流れていたであろう野洲川の河川氾濫原に対して生産性を上げようとする近世期の開いの結果であろうし、また南側でみられた中世期の用水路跡は、当時北側の湿地帯に対して安定していた生産域の土地区画を示すものであろうことが判明してきた。

今年度の調査をもって、本区画整理事業の対象地のほぼ全域を調査したこととなった。しかしながら、その対象は、道路建設という線の調査である。今後の調査にその全体像がさらに明瞭になることに期待したい。(猿向)



1トレンチ西壁土層断面状況



5-Eトレンチ出土石匙



17-Nトレンチ暗渠排水路検出状況(南東から)

⑬ 野尻遺跡

調査地 栗東町大字刈原字五反町46他

調査期間 1992年6月1日～6月6日

調査面積 65㎡

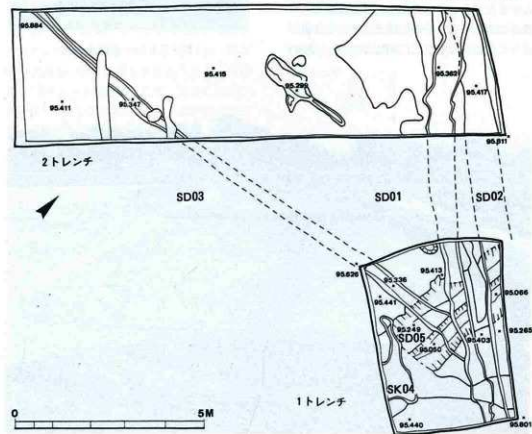


調査地位置図

今回の調査は、J R東海道本線栗東駅前土地区画整理事業後の造成工事に伴う発掘調査である。本調査地周辺は、既に91年度の調査において道路建設に伴い調査を実施している。本調査地東50mの17トレンチでは、鎌倉時代の掘立柱建物跡2棟・土壇・溝などが検出されている。

調査にあたっては、工事対象地のうち後世の削平が予測される部分は避け、南東部に2本のトレンチを設定した。東側を1トレンチ、西側を2トレンチとした。

層序 調査地で認められる基本的な層序は、大別すると次の3層である。上層から、層厚25cm程の現代耕作土層、中世期の遺物を包含する層厚10cm程の黄灰色系粘質土の整地土層、そして、黄橙褐色粘質土層の地山層である。遺構はすべてこの地山層上面で検出した。



調査地遺構図

遺構 検出した遺構は、弥生時代末から古墳時代初めの溝、および、鎌倉時代初めの溝・耕作痕である。

(1トレンチ)

SD01 現地表下35cm程で検出した中世期の溝である。幅30～80cm・深さ20cm程を測る。埋土は、灰色砂層混じりの灰色系粘質土である。
SD02 SD01と平行する中世期の溝である。幅70cm・深さ20cm程を測る。

SD01・SD02は、2トレンチにおいてもその延長部が検出されており、また埋土および遺物からも、本調査地周辺で認められる中世期の農業用水路と推測される。

SD03 SD01と重複する東西溝。幅40cm・深さ10cm程を測る。このSD03は、正東西方向の溝であり、中世期の土地区画をほぼ踏襲する現地地形に直交するものの、状況的にSD01の支流と考えてよいだろう。

SK04 灰色砂質土を埋土とする不定形土壌。遺物から近世期の耕作痕だと思われる。

SD05 中世期の溝SD01・SD02・SK04と重複する南北方向の流路。幅180cm・深さ40cm程を測る。流路は、東側に溝の中心を持つ片寄りの2段溝であり、下段の溝底は幅30cmを測る。埋土は、上段部分には鉄分を含んだ茶褐色系粘質土が、下段部分にはスミ混じりの暗茶褐色粘質土が堆積する。時期的には、弥生土器のV様式の甕片が出土していることや、埋土等の状況から、調査地周辺で認められる弥生時代末から古墳時代初めにかけての流路と考えてよいだろう。

(2トレンチ)

2トレンチでは、先に述べたように1トレンチで検出したSD01等の延長部の他に、近世期の耕作痕・不定形土壌を検出している。
遺物 今回の調査で出土した遺物には、弥生土器・土師器・黒色土器などがある。しかし、量的には少なく、そのほとんどが、中世期の溝から出土したものであり、その遺存状態は概して悪く細片のものである。(猿向)



1トレンチ遺構完掘状況(東から)

20 野尻遺跡

調査地 栗東町野尻263・265

調査期間 1992年6月2日～7月9日

調査面積 720㎡



調査区位置図

本調査では、縄文時代から平安時代に属する、土壇・掘立柱建物・溝などの遺構を確認した。

土壇（SK-01）は不整形な遺構である。挟入が深く、基部の両端がまるみを帯びた、縄文時代と考えられる石鏃が出土した。

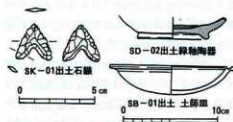
中世前期は、溝（SD）と掘立柱建物（SB）が検出されている。SD-01は、時期を特定しえなかったが、重複の関係から、SB-01やSD-02より先行するものである。

SB-01は、3×4間の掘立柱建物である。北西部分には、上屋を支える構造柱が検出されなかったため、土間等の空間が存在したと思われる。建物の方位はN-33°-Eであり、

栗太郡主条里地割の方位とほぼ一致する。

柱穴からは、10世紀前半に比定される黒色土器鍋、乳白色のての字口縁を有する土師皿が出土している。SD-03は、時期は特定できなかったが、SB-01に平行しており、屋敷の区画溝と思われる。

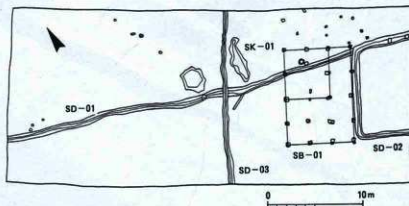
SD-02は、SB-01に後出するもので、調査区内において、コの字状に巡る。溝内からは、10世紀中頃から11世紀前半の緑釉陶器が出土している。（藤岡）



出土遺物実測図



調査地全景



調査地遺構図

② 野尻遺跡

調査地 栗東町大字下鉤字雁杭口

923-1, 924-1

調査期間 1992年4月16日～6月26日

調査面積 1,780㎡

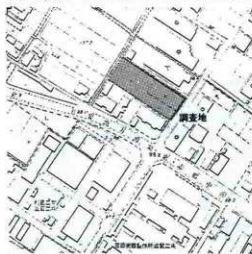
本調査では、河道もしくは溝と思われる遺構を検出した。削平が著しく、残存する溝は10～15cmの深さで、その性格もはっきりとしない。時期は、埋土中の土器から古墳時代前期と推定している。

包含層からは奈良時代の須恵器片を数点確認している。

下鉤・野尻から近接する刈原地区にかけては、この奈良時代の土器片・瓦などが散在している。それらは全て包含層からの出土で、この地域に瓦ぶきの建物が存在したであろう可能性と、比較的早い時期に整地されたことがわかる。

報告した遺構面から下層について若干判明したことを述べておく。

黄褐色系土層の遺構面をとると下は灰褐色粘土、さらに下層にゆくに従って灰色が濃度を増し、しだいにシルト、小石、礫層と変わる。地表面から約3mでスクモ層にあたり、



調査地位置図

ここから加工痕のある木片2点を確認した。

今後の調査には留意が必要である。(橋本)



調査地全景(北)



調査地全景(南)



下層確認グリッド

② 野尻遺跡

調査地 栗東町大字下鉤地先

調査期間 1993年1月25日～3月24日

調査面積 566㎡

当野尻遺跡は、昨年、一昨年に続く道路改良工事に伴う発掘調査である。

過去の調査では、周辺は中世を中心とした遺跡として認知されている。



調査地位置図

本年度調査では中世（と、それ以降）と思われる遺構としては暗渠排水溝が1条で、遺物も乏しく、信楽焼片が若干包含層から出土している。

暗渠検出面は田の床土の直下で、この面より30cm下げた面より古墳時代の竪穴住居跡を検出した。

住居は1辺5m四方ほどの規模で、床面に1cmほどの厚さで均一に炭化物が敷いてあるような状況であった。これは床全体にまんべんなく見られたものであったがその性格は不明である。

かまど、貯蔵穴、排水溝などの施設は確認されず、その使用が短期であったか、または廃棄処分となった家屋の可能性がある。

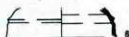
住居内の土器の出土は、須恵器杯身、高杯、甕などで細片が多く床全体からランダムに出ている。また、水晶の加工品が1点でているが、これは4×2.5cmの大きさで、片側に刀をつけようとした痕がある。

この古墳時代に該当する面を追ってゆくと過去の調査地内では礫または小石・砂層であり、当調査地が旧河川の微高地にあたると言える。

（橋本）



$s = \frac{1}{4}$



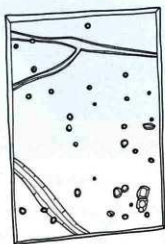
出土土器実測図／1～3住居内、4～7溝内



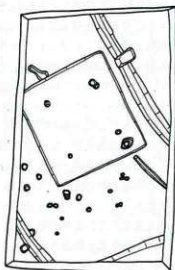
作業風景



土器出土状況



0 5 m



調査地遺構図



調査地・溝



調査地・竪穴住居

② 総遺跡

調査地 栗東町大字北中小路

字竹ノ花 1-1、7-1

調査期間 1992年 7月27日～9月17日

調査面積 1,000㎡

総遺跡周辺は区画整理に伴う調査の際、方形周溝墓を多数検出したことで知られているが、今回の調査では遺構面は中世のもの1面で、下層からも特筆すべき遺構、遺物は確認できなかった。

調査は地理的条件上3分割して行われた。

遺構図3-1は対象地北東部にあたり計画性のある暗渠排水溝と多くのピットが見られる。ピットは現状では明確に建物を復元できるとは言えず、これと暗渠との時期の前後関係もわかってはいない。いくつかの土壌についても性格のはっきりしないものであった。

暗渠排水溝の中には樹皮でつくられた樋と約5mおき、または別の暗渠との交差部分にジョイントとなる木製の枕木(?)のようなものが据えてあった。これは樋を通す穴を穿った40cmほどの木片で、遺存状態はよくなかったが、ヤナギ科の木と推定される。



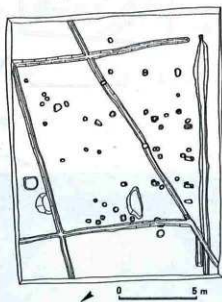
調査地位置図



調査地全景



暗渠



遺構図 3-1

遺構図 3-2 は北西部分で、3×3 間の掘立柱建物を検出した。柱穴埋土から黒色土器を出土している。

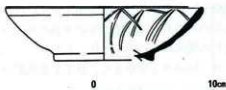
後述する花粉分析の資料はこの地区の中央北端に見える土壌から採集されたものである。

性格不明の土壌だがわずかに炭化物を出している。

遺構図 3-3 は南側部分で、不規則なピット群、耕作痕と思われる溝跡と自然流路を検出している。ピットは特に遺存する深さがまちまちで、3-3 区に関して言えば下層は、南にゆくに従って砂層、北端では礫層が見ら

れるものであった。

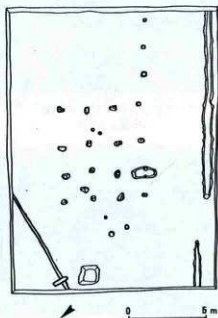
調査地からやや南下すると「イチノツボ」と呼ばれたため池が存在していたことが知られており、元来この辺りが田地として利用されていたと推察される。(橋本)



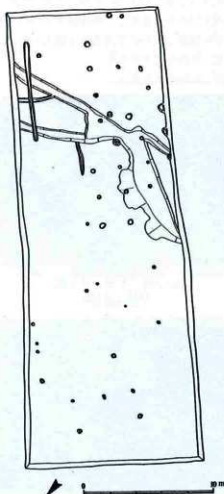
出土土器実測図



調査地全景



遺構図 3-2



遺構図 3-3

〈報告〉

縄遺跡の花粉分析

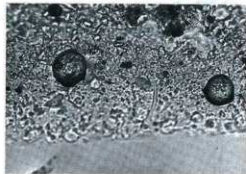
栗東自然観察の森が主催する平成4年・青少年科学教室の本年度のテーマは「遺跡のあった頃の自然環境を調べよう～現生花粉と化石花粉～」であった。小中学生を対象に行われたこの科学教室に当縄遺跡の資料が用いられたため簡略ながら報告を付しておく。

尚、詳細は主催者発行の冊子を参照願いたい。

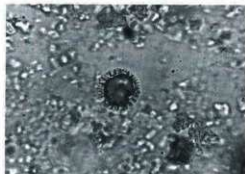
資料採集は1992年8月6日に行われた。上層をA～Gまでの7つにわけ、それぞれから10cmずつの土を採集し、顕微鏡でその中の花粉等を観察したものである。土層A～Gは、

A：黒褐色の現耕作土

B：灰褐色の粘質土



シソ科 キランソウ属
G層 ×400



スイレン科 コウホネ属
F層 ×600

C：黒灰褐色粘質土

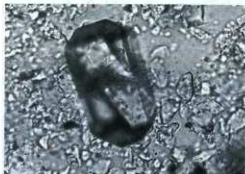
この3層が遺構面までの覆土である。

D：黒褐色土層

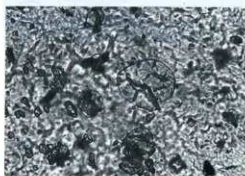
若干のマンガンを含み、これが遺構面である。

E：黒灰褐色土

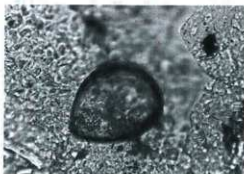
F：茶褐色粘質土



水晶 ×600



スイレン科 オニバス属
G層 ×600



マメ科 ヌスビトハギ属
G層 ×600

G：青灰粘土。

この粘土が1mほど続き序々に礫を混入し2m過ぎから完全な礫層となる。以上D～Gまでが土壌の壁面を削って採集した部分である。土層の該当する時代はA：現代、B～C：中世以降、D：中世、E～G：中世以前、以

前の調査によりE～Fは弥生時代かと推定している。

分析の結果から水辺や湿地といった環境が復元できる。今後の調査により更に細かく状況復元のできることを期待している。(橋本)

資料名	化石花粉の種類
A	・オモダカ科 (オモダカ属) ・スイレン科 (オニバス属)
B	・ヤナギ科 (ヤナギ属) ・イネ科
C	・スイレン科 (ヒツジグサ属またはジュンサイ属)
D	・ガマ科 (ガマ属) ・ヤナギ科 (ヤナギ属) ・キク科
E	・スイレン科 (オニバス属)
F	・スイレン科 (コウホネ属) ・サクラソウ科 (オカタラノオ属) ・オモダカ科 (オモダカ属) ・ガマ科 (ガマ属)
G	・スイレン科 (ヒツジグサ属またはジュンサイ属) ・スイレン科 (オニバス属) ・アカバナ科 ・マメ科 (ノアオキ属) ・マメ科 (ヌスビトハギ属) ・オオバコ科 (オオバコ属)

(写真は全て栗東自然観察の森提供)



資料採集



資料採集



資料採集



資料調査

②4 縄 遺 跡

調 査 地 栗東町北中小路410-1

調査期間 1992年4月15日～6月17日

調査面積 550㎡



調査地位置図

縄遺跡は東山道（近世・中山道）に接する集落跡である。旧村では物部村に含まれ、榎札等によると13世紀には存した大宝神社、その摂社である迫来神社は本遺跡内に位置している。

本調査で発見された遺構・遺物は11世紀末葉から13世紀までの時期に属するが、その盛期は12世紀後半から13世紀代に属する。

12世紀後半から13世紀中頃までに存した遺構は、およそ、その主軸を磁北から約40度東に向いた方位を取る。T-1の建物については、1～5まで、区画溝については1・3・4、T-2溝8、T-3井戸1がこの時期とみられる。

13世紀中頃から末期の時期に属する遺構はその主軸を磁北より約34度東に振れた方位を取る。T-1の建物に関しては6・7、区画



T-1（南東から）

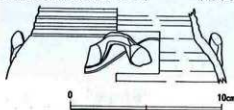
溝では溝2、T-2溝1、T-3溝1、井戸ではT-1井戸1・2などがこの時期に属するものとみられる。

T-3井戸1内からは墨書のみられる黒色土器碗3点他が出土した。平仮名「あゆ」と記されたとし、3点ともに底部外面にこれを認める。この井戸は13世紀中頃の遺物を含むT-3溝1の溝底で確認された。深さは約80cm遺存し、遺構面から推定すれば約1.5m以上、砂礫層まで掘り込まれている。井戸枠は確認されなかった。下層は灰茶色粘土に有機物、地山の礫が混じる。墨書土器は堆積中位の層、黒灰色粘土層からの出土である。井戸廃棄後の祭祀に関わるものとみられる。

尚、墨書のある黒色土器碗が当遺跡近隣でも出土している。墨書「大」で13世紀代の時期とされる。

この他、緑釉陶器碗、青磁劃花文碗、褐釉四耳壺とみられる小片、常滑産陶器などが出土している。

当地域には前述の大宝神社があり、その宮座は13世紀後半に遡りえると言われる。本調査が直接に関係するかは不明であるが、中世集落の姿が垣間見えよう。（清水）



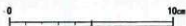
四耳壺



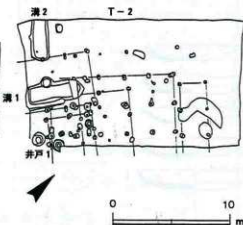
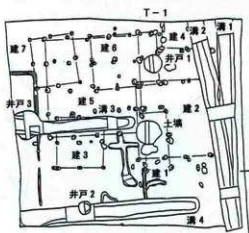
T-2（南から）



墨書土器 (T-3 井戸 1)



墨書土器実測図



遺構図

②⑤ 縄 遺 跡

調査地 栗東町北中小路417-1他

調査期間 1992年9月29日～12月28日

調査面積 329㎡



調査地位置図

本調査地周辺では北西約50mに前出②調査地、北東約70mに大宝保育園及び幼稚園用地調査地（1990年、90-⑬）等において、古代末期から中世の集落跡が確認されている。

本調査でも12世紀から13世紀にかけての掘立柱建物5棟、井戸1基等が確認された。

遺構は2期に大別できる。その境を13世紀前半から中頃とし、建物主軸の変化が本調査地においても認められることによる。

I 期

SB-1～4、SE-1が該当する。建物は1→2→3・4へと変わっていったものと思われる。主軸は磁北より約40度東に振った方

位を取る。

SE-1は長径約2m、短径約1.5mの楕円形の掘り方を呈し、深さ1.25mを計る。井戸底には直径40cm、高さ30cmの曲物枠がのこっていた。

I期の時期に関しては、SB-2とSE-1の埋没時期が12世紀中頃とみられる。これに先行するSB-1は時期を決めかねるが、さほど時期幅があるようには思われない。

II 期

SB-5はその主軸を磁北より約33度東に向く方位をとる。桁行3間、梁行2間以上の建物である。

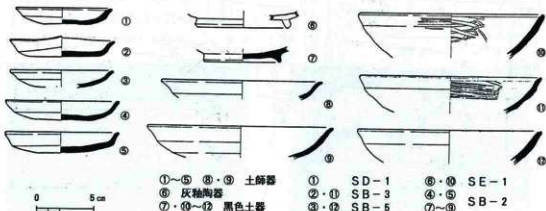
SD-1もこの時期に含まれる可能性がある。

II期の時期については13世紀前半から中頃に比定できる。

遺物についてはコンテナ2箱程度の出土量で、黒色土器碗、土師器小皿・大皿が多数を占め、灰釉陶器が1点みられた。

本調査でみられた遺構方位の変化は90-⑬調査、②③調査でみられる変化と同様である。②④調査地の変化は少し後出するものとみられるが、一様に栗太条里にそった方位に揃えられた感がある。

また、14世紀代に入ると突如として住居跡を見出せなくなるのも同様である。洪水・火



災等の痕跡は認めがたい。建物が礫石建てとなった可能性もあるが、井戸・区画溝等、住居に関連する遺構が見られないことから、この可能性は低いものと言える。やはり、14世紀に入り、忽然と建物群は消え去る。

当地域でみられる密にする建物群とそれに伴う柵や溝で構成される居住域の性格、そしてその廃絶原因。課題の多い遺跡である。

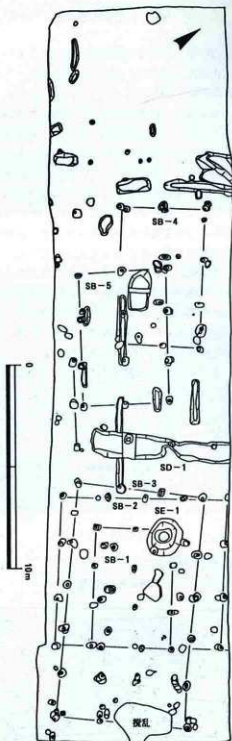
(清水)



遺構（上段T-1、下段T-2）



SE-1



遺構図

②6 下鈎遺跡

調査地 栗東町下鈎字神ノ子1221-1,3

調査期間 1992年2月24日～5月30日

調査面積 600㎡

本遺跡は、野洲川が主として形成する扇状地上にあり、葉山川流域に位置し、栗東町内においては弥生時代の代表的な遺跡である。本調査地は、別に紹介する、弥生時代の棟持柱を持つ建物の出土した調査区の南東に隣接する。この調査地の西側に近接した地点では、流路より弥生時代後期後半～末および古墳時代初頭の土器がまとまって出土している。

今回検出されたものは、西側の地点から続き、調査地内で西に屈曲する流路、流路屈曲部北東側の肩口の1×1間の掘立柱建物、および調査地北側の細い流路、さらにその上をとおり平安時代の流路、などである。

今回見つかった遺物で最も古いものは、縄

文時代中期初頭（中津式）の土器で、後世の流路に混入していた。次に出土する流路の遺物の時期は、弥生時代中期で、流路内の遺物としては、少数である。

流路（SR-1）からは、弥生時代後期後半を中心とする時期の遺物が多量に出土した。土器には各器種があり、とくに肩口からの斜面に集中している。ほかに、加工木材、木製横槌が出土した。流路上層の時期（弥生時代後期末～古墳時代初頭）には流路屈曲部の北側に鉢・器台・高杯を中心とした土器が据え付けられるような状態で出土している。

平安時代の流路は調査区内で大きく北側に屈曲するもので、緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器、馬骨などが出土した。

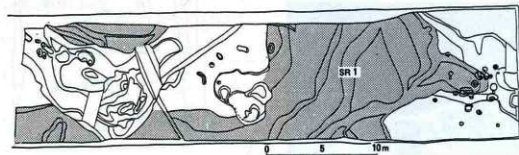
今回検出された、遺構・遺物は、隣接する調査区で見つかった建物群とともに、弥生時代後期の社会を考える上で貴重な資料になるう。（雨森）



調査地位置図



平安時代の流路



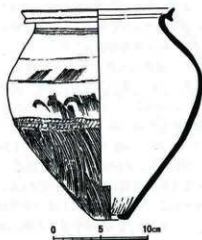
平安時代の流路



SR 1 肩口土器出土狀況



SR 1



SR 1 出土土器



SR 1 下層土器檢出狀況



SR 1 出土銅鐵



SR 1 下層土器檢出狀況

② 下鉤遺跡

調査地 栗東町大字下鉤字下神ノ子1220

調査期間 1992年3月2日～6月22日

調査面積 1,450㎡



調査地位置図

下鉤遺跡は、これまでの数次にわたる発掘調査により縄文時代前期から中世に至る様々な遺構・遺物が発見されている複合遺跡である。

今回の調査地は下鉤遺跡の西端部に位置し、南にはJR草津線、西に接してJR東海道本線、東山道(中山道)が平行して走っている。

当調査地の周辺では1988年から数カ所の調査が実施されており、河道跡から、主に弥生時代後期中葉から後葉にかけての多量の土器が出土している。特に当調査地B区の東隣であるD区では、狭い調査範囲にもかかわらず石刻2点、木製品の手斧柄、銅鏡6点や銅滓

などの遺物が出土しており、注目される。^②これらの調査成果から、河道跡に隣接した本調査地などの周辺地域に集落跡の存在が想定されていた。

本調査地(A・B区)では、水田耕作土直下の黄色粘質土面より弥生時代からの近世に至る遺構を検出した。遺構検出面の標高は約95mである。遺構は、弥生時代後期の河道跡・溝・土壇・掘立柱建物跡、平安時代後期の溝(SD-4)、が出土した。河道跡はB・D区の東端から北流してA区の北半部を西流しており、A区の北端では弥生時代後期の遺物を包含する河道の堆積層がかろうじて残存していたがその上層は平安時代の遺物を含む河道となり、さらに鎌倉時代に河岸を浅く掘り広げている。河道が完全に埋まったあとに掘られた柱穴からは永楽銭が出土した。

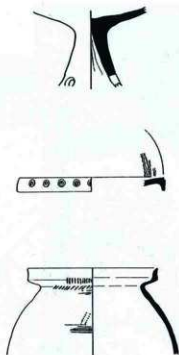
弥生時代の遺構は土器を多く含む溝SD-1・3の他に、柱穴群があるが、明確に建物となるものは少ない。しかし、A区において大型の掘立柱建物跡(SB-1)を検出した。

SB-1は、桁行5間(8.8m)、梁行2間(5.4m)の建物で、床面積は約50㎡を測る。

この大型建物の特徴は、妻柱外側約2.8mに棟持柱があること、桁側柱列の掘り方が布掘で、さらに掘り方には、柱を立てる際に落とし込みやすくするため設けたと思われる傾斜面を持つ点が上げられる。また、幅0.9m、深さ1mの柱穴内には、9本の柱根が残存していた。柱根はヒノキ材で、残りの良好なもので直径0.37m、長さ0.6mである。柱根のうち1本は年輪年代法により西暦69年の年代が測定された。^③

遺物は土器片が比較的多く出土した。どれも細片であったが図示したように、復元可能なものも出土した。高杯は柱穴の底から、器台と甕は、布掘の掘り方内からの出土である。

以上が調査地とSB-1の概略であるが、本調査区の調査終了後実施したG区でも弥生時代後期の遺構が出土しており、東隣で同時

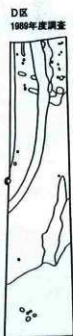
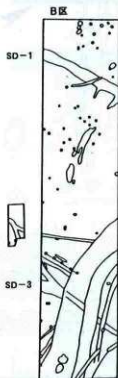
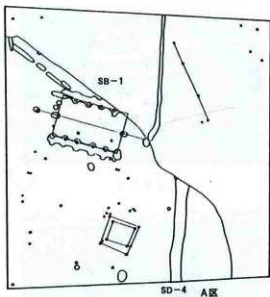
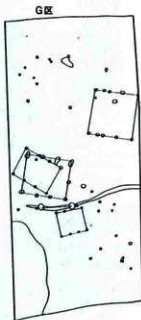


SB-1 出土遺物実測図 S=1/3

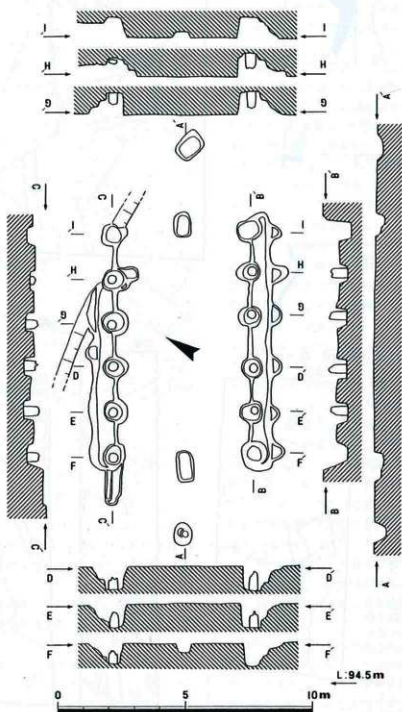
に行った調査でもやはり河道跡から同時期の遺物が出土している。調査原因などの都合からこれらの成果は本年報の別項にまとめられているのでそれらとの関連を踏まえた上でこの遺跡の性格を考える必要がある。(佐伯)

註1 大崎 隆志「下鉤遺跡④」『埋蔵文化財発掘調査1989年度年報』奈良県文化体育振興事業団 1990年

註2 奈良国立文化財研究所の測定による。削除されたり腐った分の年輪数を加算する必要がある。



遺構配置図



SB-1 实测图



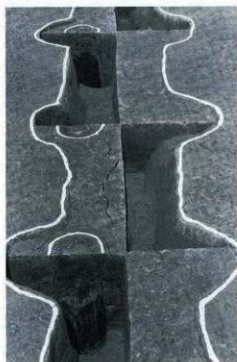
調査区全景



B区完掘状況



SB-1 検出状況



SB-1 南側柱列



SB-1 完掘状況 (東から)



SB-1 柱根

②⑧ 下鉤遺跡

調査地 栗東町大字下鉤字下神ノ子1219

調査期間 1992年6月24日～7月31日

調査面積 540㎡

本調査地（G区）では、前項の下鉤遺跡A・B区の調査終了後、引き続き調査を実施した。A・B区との位置関係は前項の遺構配置図を参照されたい。遺構は、溝1条、掘立柱建物4棟、鳥居状遺構（SG-1）が出土した。なお調査区南端のSR-2は洞ヶ上川の改修以前の流路である。そのSR-2を除く全ての遺構は出土遺物と埋土から弥生時代後期後葉と考えられる。

B区から延びる溝SD-6は、幅約45cm深さは10cmである。

掘立柱建物SB-4は、桁行4間、梁行1間（約34.2㎡）の規模で柱穴は約40cm程度で



調査地位置図

深さは約30cmを測る。SB-5は桁行3間、梁行1間（約30㎡）の規模で柱穴は40～50cm、深さ30cmを測る。SB-6は桁行3間、梁行1間（約20㎡）の規模で柱穴は25～30cm、深さは約15cmである。SB-7は、桁行3間、梁間1間（約10.5㎡）柱穴は20cmで深さは約10cmである。

鳥居状遺構SG-1は柱間約3.9m、柱穴は南西側柱穴で88cm×60cm、深さ66cm。遺存していた柱根は、直径38cm、長さ58cmを測る。北東側の柱穴は、85cm×72cm、深さ77cm。柱根は、直径34cm、長さ68cmを測る。両柱根ともに樹種はヒノキである。^② 柱穴埋土からは、甕や高杯などの細片が10数点出土した。また、これらの柱穴に付属する可能性のある柱穴がそれぞれ両外側に存在する。南西の柱穴は約23cm、深さ4cm。北東の柱穴は約35cm、深さ10cmを測る。

SG-1の特徴として、門跡に付属する柵列や溝・濠が伴わないこと（SD-6とは切り合い関係にある）、A区の大型建物と同様に柱穴掘り方に傾斜面を持つことがあげられる。

以上が本調査区における発掘調査の概要であるが、今回の調査で掘立柱建物跡や溝などが出土した事により、以前から想定されていた下鉤遺跡における弥生時代後期の集落跡の一端を知る成果を得た。そしてさらに集落は南に広がると思われる。^③ また、本調査区東側100mの調査地では、河道跡の対岸側から多量の遺物が出土している^④ので河道を挟んでさらに集落の広がりが予想される。

（佐伯）

註1 光谷拓実氏から御教示いただいた。

註2 南東約180 mの調査区において弥生時代中期末から後期の掘立柱建物跡2棟や柵列、溝が確認されている。近藤広「下鉤遺跡②」『埋蔵文化財発掘調査1989年度年報』（財）栗東町文化

体育振興事業団1990年

註3 近藤 広 「下鉤遺跡」『埋蔵文化財
発掘調査昭和63年度年報』（財）栗東
町文化体育振興事業団1989年



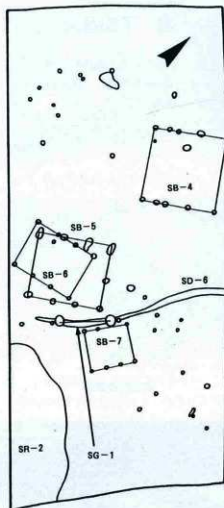
調査区全景（南東から）



SG-1



SG-1 柱根（南西側柱穴）



調査地遺構図



SG-1 柱根（北東側柱穴）

②9 下鉤遺跡

調査地 栗東町大字下鉤760の1の一部

調査期間 1992年9月25日～10月13日

調査面積 148㎡



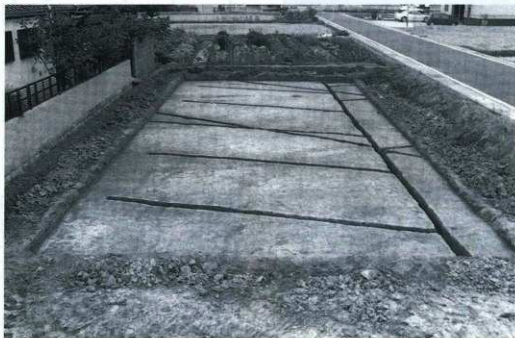
調査地位置図

本調査地周辺は下鉤遺跡の中でも暗渠排水をよく検出する地域である。

暗渠排水は水はけの悪い土地の田畑や家屋の下に作られる施設である。その目的から、高いところから低いところへ水を誘導するように作られるのが合理的と思われるのだが、本調査地のような整然と葉脈の様に計画されているものはまれである。この形式のものは付近では下鉤東遺跡に例がある。

排水溝の中は針葉樹の皮を丸めて筒状にしたものが通しており、この作りは各地の暗渠に共通している。樹皮の下から出土した土器片によりこの暗渠は中世のものと考えられるが正確な時期決定はできなかった。

暗渠についての研究は皆無に等しく今後に期待するものであるが、下鉤東遺跡のものも中世と推定されているので、このような企画の排水溝は中世のものと判断してさしつかえないものと考えている。(橋本)



調査地全景

③〇 下鈎東遺跡

調査地 栗東町大字上鈎字八反田124-1

調査期間 1992年6月29日～7月10日

調査面積 100㎡



調査地位置図

下鈎東遺跡は弥生時代後期以降、各時代の遺構・遺物を残す複合遺跡である。

今回の調査でも弥生時代末期と中世の遺構が確認されている（標高：101.50m）。

前者には性格不明の浅い落ち込みがある。調査面積が限定される為、平面的に全体プランは捉え得ないが、深さ10cm程度を測り、埋土内（濃褐色粘土層）に多量の土器片を包含する。

後者には掘立柱建物と溝状遺構がある。

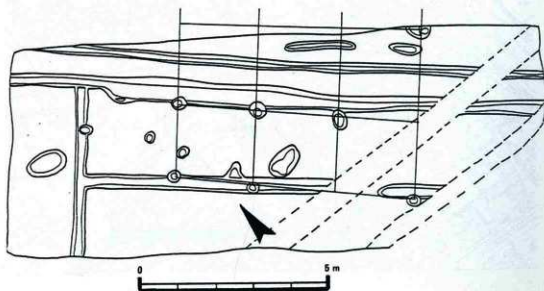


調査地風景（NW方向ヨリ）



調査地全景（NW方向ヨリ）

建物は略東西2柱間以上×略南北3柱間の総柱建物である。溝状遺構はいずれも幅30～60cmの小溝である。中には底に竹を敷き並べた例もある。暗渠水路として機能したものであろう。（大崎）



③ 中沢遺跡

調査地 栗東町大字中沢字中畑194-1

調査期間 1992年4月2日～7月31日

調査面積 1,536㎡

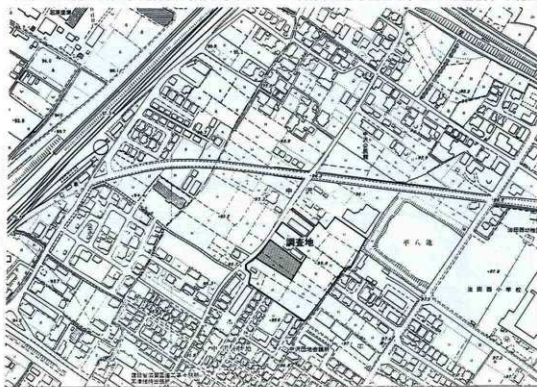
本調査は、1990年11月から継続して実施しているもので、本年度は、Ⅲ期分としてT-13を調査した。

I・II期の調査では、調査地のほぼ中央を流れる弥生時代中期からの旧河道を中心として、北側では溝、土壌等、南側では周溝墓群等弥生時代の遺構が検出されている。古墳時代前半期に降ると、河道に沿って北側と南側に堅穴住居による集落が形成される。北側の住居群は掘立柱建物を伴い、切り合いなどから3小期に分けられる。また、集落の形成と同時にT-4 SX03を初めとする古墳時代の墳墓群が造営されはじめる。集落は古墳時代前半期にのみ見られ、その前後の時期のものは

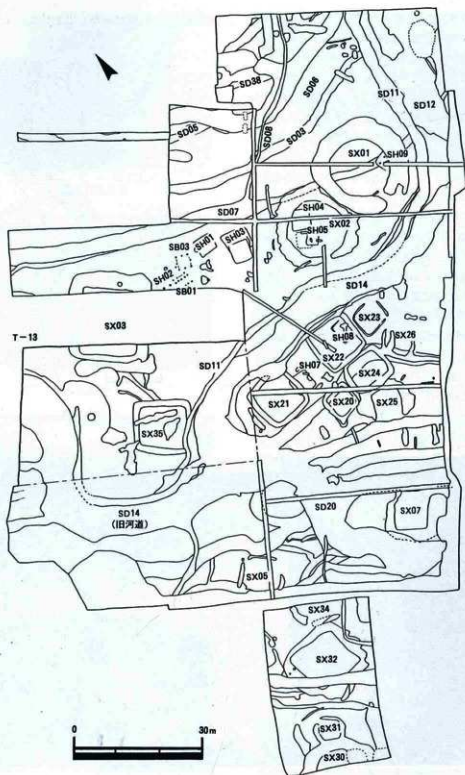
検出されていない。しかし、弥生時代および古墳時代後半期も墳墓群が造営され続けることから、この近辺で小移動を繰り返しているものと思われる。旧河道は他方向からの流路を集めつつ、古墳時代前半になるとその河幅をかなり狭め、東から西へ、南から北へと蛇行する。流路の整備（SD14）はこの頃行われたと思われる。古墳時代後半期に入り、その後は流れも穏やかとなり粘質土が堆積する。旧河道およびSD14からは多量の土器と木製品が出土している。

本年度調査のT-13では、T-4で一部を検出したSX03の南辺溝と、同様の方形墳のSX35、旧河道およびSD14、溝、ピット等を検出した。

旧河道はT-13の3分の2の面積を占めていたが、その後の堆積により河幅を狭めて北側は平地化する。流れは南側へ偏り、転じて北方へ蛇行する。量的には少ないが弥生時代中期の土器も出土し、SD14と重複する範囲



調査地位置図

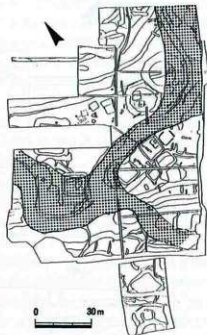


およびSD14河床から古墳時代前半の土器、および建築部材、農耕具等の木製品が多量に出土した。SD14は、既調査区の状況と同じく河床は平たく整備され、河幅もほぼ一定しており、粘質土が堆積するなど流れは穏やかであったと推察される。粘質土からは古墳時代後半の遺物、最上層からは奈良時代の土器片が若干出土している。

SX03は、T-4調査分も含めて東西14m×南北15mの規模である。溝幅平均1.5m、深さ平均0.3mを測る。既調査の北辺溝は幅約2.5m深さ0.4mとやや大きく、古墳時代前半期の土器と共に直径4cm、長さ1mから3.5mの棒状木製品が多数出土している。SX35は、旧河道堆積土上にあり、東西11m×南北10mの規模で溝幅平均1.5m、深さ0.4mを測る。北辺溝内から古墳時代前半期の土器が多量に出土した。

旧河道およびSD14の出土木製品には、丸柱、板材、杭、矢板、馬鍬、長柄鋤、着柄鋤、えぶり、臼、杵、木鐺、桶、槽など多種多様のものがある。また、農耕具の未製品、ミカ

ン割りにした板材も多く出土した。(平井)



旧河道流路



T-13全景



S X 03南辺溝



S X 35



旧河道



馬 轡 (まぐわ)



桶 T-13旧河道砂礫層出土

一木をくり貫いた桶である。口縁部は土圧によりかなり変形しているが、直径約50cmと推定される。底端部を厚く残し、直径約40cmの円形の底板をはめ込む。裏底には細い板が渡され、底板を支えている。



1991年度調査T-5旧河道出土

縦12.3cm、横13.2cm、厚2.5cmの板材の切れ端のようであるが、一方の面に円と放射直線により太陽に似た図柄が刻まれている。古墳時代前半期の土器と共に出土した。

③② 霊仙寺遺跡

調査地 栗東町大字霊仙寺地先

調査期間 1992年10月26日～10月28日

調査面積 1,439㎡



調査地（北から）



調査地（中世の溝）



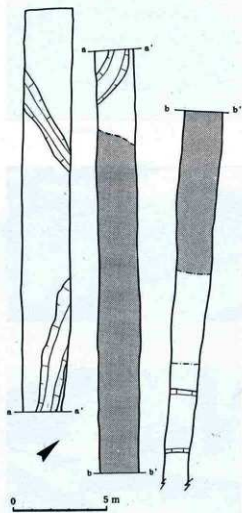
調査地位置図

確認された遺構は東西に走る溝が3本で、その性格ははっきりしないが若干出土している土器より中世のものである。

遺構図中スクリーントーンの部分は、湿地もしくは池沼と考えられる黒褐色土である。

付近の人の話によれば、周辺にはコマイケ（またはコマガイケ）という池のあったことが伝えられており関係が想定できる。

黒褐色土の回りは黄褐色の安定地盤であり南下に従って礫を多く含む。（橋本）



調査地遺構図

国庫補助事業 埋蔵文化財調査

国補事業一覧表

33	峰屋遺跡	専用住宅	跡屋604-1	掘立柱建物・土壇・溝（平後）	黒色土器等	76	清水	
34	高野遺跡	専用住宅	六地蔵308-3	溝、ピット	須恵器、土師器	77	清水	
35	下向遺跡	専用住宅	下向710-1	掘立柱建物2棟（中世）、溝、ピット（不詳）	石器、割片、黒色土器	78	雨森	

遺構覧では、下記の略語を用いた。

（縄）縄文時代、（弥）弥生時代、（古）古墳時代、（飛）飛鳥時代、（白）白鳳期

（奈）奈良時代、（平）平安時代、（鎌）鎌倉時代、（室）室町時代、（江）江戸時代

（明）明治時代 また、時代が特定できないものについては古代、中世等を表わすことがある。

③ 蜂屋遺跡

調査地 栗東町蜂屋604-1

調査期間 1992年8月25日～9月18日

調査面積 77㎡



調査地位置図

本調査では掘立柱建物1棟、土壇2基、ピット、小溝群を確認した。

掘立柱建物は2間×1間以上で、東西4m南北1.9m以上の規模をもつ。柱の掘り方は40～50cm程度、柱穴は直径約20cmを計る。北側柱筋の2カ所で柱の抜き取りが認められた。

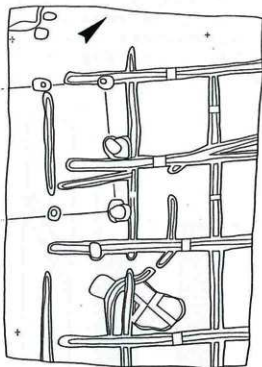
土壇2は直径1.68m、短径1.1mを計る。境内は浅く、約15cmの深さである。

小溝群は幅0.3～0.5m、最も深いもので20cmを計る。

本調査では出土遺物が極めて少なかった。従って各遺構の時期は不明確であるが、小溝内から黒色土器碗片が出土していること、本調査地西南50m地点（平成2年度調査）で確

認された平安時代後期の建物方位とほぼ等しいことから、本調査で確認された建物は平安時代後期に存した可能性がある。

今回の調査では古代末期の集落跡がこの調査地にも及ぶことが推定された。（清水）



遺物全景



建物（北から）

③④ 高野遺跡

調査地 栗東町六地藏908-3

調査期間 1992年11月4日～11月17日

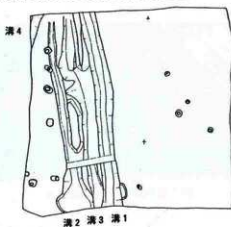
調査面積 91㎡



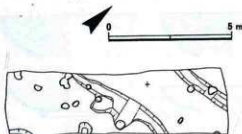
調査地位置図

本調査では溝、ピット、土壌を確認した。遺構は耕作土面より25cm下にみられる黄灰色土から切り込まれる。

溝は4条確認できたが、最も深さのある溝4で40cm、溝1で20cmを計る程である。溝1・2は東側トレンチで屈曲または蛇行する。溝3はほとんどのこらない状況である。



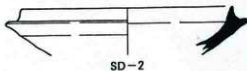
溝2 溝3 溝1



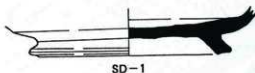
遺構図

溝1～3までは溝2→1→3の順に新しくなっている。溝2・1からは須恵器が出土した。溝2からは6世紀中頃の杯蓋片と7世紀中頃の杯身片、溝1から7世紀後半～末期の杯片が出土した。

ピット群は時期、構成ともによくわからず今後の調査を待ちたい。(清水)



SD-2



SD-1



調査状況



調査地全景

③⑤ 下鉤遺跡

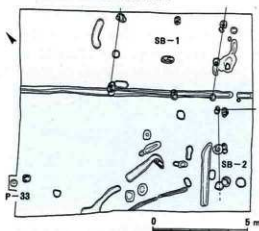
調査地 栗東町下鉤710-1

調査期間 1993年3月1日～3月31日

調査面積 120㎡



調査地位置図



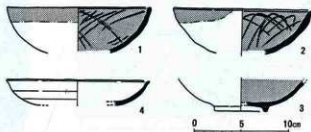
第1遺構面遺構図



第2遺構面全景 (北東から)



第1遺構面全景 (北東から)



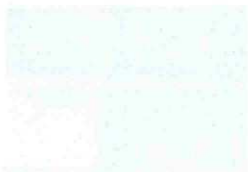
P-33出土土器実測図

本調査区近隣では、弥生時代の流路から多量の木製品がみついているのをはじめとして縄文時代以降各時期の遺物が出土している。遺構では、奈良時代～室町時代の建物跡が検出されている。

今回の調査では、石器剥片や土器片など縄文時代の遺物を含む沼沢地状の堆積を確認し、当該期の遺跡の広がりや、自然地形を知り得る資料となった。また、沼沢地状の堆積土上に形成された溝からは古墳時代前期の遺物が出土するので、古墳時代前期の集落の広がりを知る手がかりとなる。

前述の沼沢地堆積土をベースとして、掘立柱建物跡が2棟検出された。建物跡の柱穴からは黒色土器や土師器の小片しか出土しなかったが、他のピット(P-33)より12世紀頃と考えられる黒色土器がまとめて出土していることから、建物跡も同様の時期である可能性が高い。(雨森)

町事業 埋蔵文化財調査



町事業一覧表

36	蜂屋遺跡	修理	蜂屋231の一部	基壇跡	土師器	80	大崎	
37	鹿王古墳	修景整備	上砥山300		須恵器	81	大崎	範囲確認
	下戸山古墳	範囲確認	下戸山	古墳1基	埴輪、布管式土器		佐伯	93～継統
	和田古墳群	遺跡整備	下戸山字和田	古墳4基	須恵器、土師器、鉄製品		大・佐	93～継統

遺構覧では、下記の略語を用いた。

(縄) 縄文時代、(弥) 弥生時代、(古) 古墳時代、(飛) 飛鳥時代、(白) 白鳳期

(奈) 奈良時代、(平) 平安時代、(鎌) 鎌倉時代、(室) 室町時代、(江) 江戸時代

(明) 明治時代 また、時代が特定できないものについては古代、中世等を表わすことがある。

③ 蜂屋遺跡

調査地 栗東町大字蜂屋字和宮神社拝殿
調査期間 1992年12月18日～1993年1月28日
調査面積 50㎡



調査地位置図

地元に残る古文書（蜂屋文書）によれば、和宮神社は養老元年（717）勧請と伝えられる古社である。室町時代の建造とされる三間社流造りの本殿は国重要文化財（建造物）に指定されている。

今回の調査は拝殿の解体修理工事に伴うもので、同基壇の測量と一部掘り込みを実施した。

基壇の現状規模は一辺7m以上の方形を呈する。高さ約60cmを測り、床土直下の褐色粘土層上に直接土盛りをして構築されている。版築は表面下数センチのみに認め得るにすぎないが、全面に白色砂を敷きつめ、比較的丁寧な化粧が施されている。白色砂内からは多量のかわけや銅銭が出土している。礎石は50センチ前後の割石が使われ、柱座には柱据え置き痕を残す。

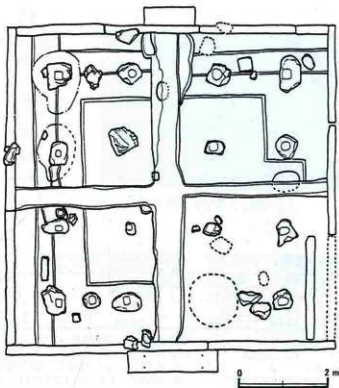
なお、断ち割り部の断面観察によれば、現基壇下約20cmにそれ以前の基壇が重複して遺存しているのが確認された。

詳細は明瞭でないが、表面には同様の白色砂による化粧痕が残されている。

現状の基壇の構築時期は出土遺物から近世以降と見て大過ないが、当初の基壇のそれは特定し得ない。前述の蜂屋文書は永正二年（1505）の神社の再興を記載するが、拝殿の解体調査の成果や出土遺物の詳細な検討を含め、改めて考察を加えたい。（橋本・大崎）



拝殿基壇（SW方向ヨリ）



③7 龍王古墳

調査地 栗東町大字上砥山300

調査期間 1993年2月22日～3月4日

調査面積 20㎡

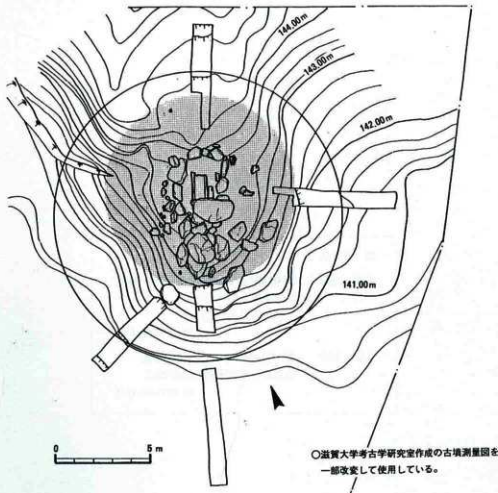


調査地位置図

龍王古墳は栗東を代表する後期古墳の一つである。また「龍王さん」として古くより地元の信仰対象ともなっている。その特徴は以下の様に列記される。(1)金勝川沿いの小平野を俯瞰する奥まった小尾根先端に群を形成せず、単独で立地する。(2)南に開口する横穴式石室には家形石棺を内蔵する。

今回の調査は景観整備に伴い、その墳丘規模確認を主目的として実施したものである。その調査結果の要点は以下の様である。

(1)墳丘下部は自然地形の削り出し、上部は盛土によって形成される。(2)羨道下斜面より数点の須恵器片(飛鳥Ⅱ期)が出土する。(3)本古墳は径15m前後の円墳と復元され、下限は7世紀前半の所産と推定される。(大崎)



発行日 平成5年9月1日

編集・発行 勸業東町文化体育振興事業団
滋賀県栗太郡栗東町川辺390-1
栗東町民体育館内

TEL 0775-53-4321

印刷・製本 株式会社スマイ印刷工業
滋賀県栗太郡栗東町川辺568-2

TEL 0775-52-1045